真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」

日時々雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！（改悪?版）」

【Ｎコード】
Ｎ２８１４Ｚ

【作者名】
日時々雲

【あらすじ】
ちょっと、どころではない環境で育ってきた、口の悪い主人公が頑張るお話。彼の存在は、外史にどのような影響を与えるのだろうか。
（とあるサイトにて、投稿してたのに手を加えたものです）

はじめに

この作品は、とあるサイト（名前出しは、一応止めておきます）で投稿していたものに手を加えたものです。
改良もあれば、改悪の部分もあったりします。
初見ではわからないですから、問題はないのですが。

極力コメディにしたいですが、シリアスを含んじゃいます。
まだまだ経験が足らないので、拙いです。
そして、原作キャラのキャラ崩壊が結構激しいです。
さらに、オリキャラも多数（１０ぐらい？）存在します。
さらにさらに、主人公は（自重はしてますが）チートです。
最後に、アンチっぽいのを含みます。

そんな要素が苦手、もしくは嫌いな方は、ｂａｃｋでお願いします。

かなり長くなりそうですが、どうかお付き合い下さい。

第一話（前書き）

プロローグというやつ？です。

第一話

昔、むかしはるか後漢末期。

ある所にある少年がいた。

容姿は悪くなく、むしろ世間一般から見れば良い方だと言えるだろう。

そのくせ着ている服はみずぼらしく、貧しさだけで服が擦りきれてぼろぼろになっているとは言い難い格好である。

そんな少年がいま、暗い暗い穴の中にいた。

「……うぅん、冷たいし、かてぇなぁ。下が土だから当然といえば当然かぁ？」

（土？あん？）

「なんでこんなとこいるんだっけか？」

☆　☆　☆

さかのぼること数刻前……

「うぅ……、腹が、げ、限界だ！」

少年は森のなかをさまよい歩いていた。
言わずともわかるであろう。
食糧調達の為である。
最後の食糧が尽きて数日が経っており、足元はふらつき、体力はもう限界だった。

「こんなことになるなら、最後の食糧をあの馬にやらなけりゃよかったぜ……。でも、ああも嬉しそうに食ってたし、しょうがねぇか」

（やっぱり動物には優しくしないと、なぁ。
動物愛護家たるもの、そうする義務があるぜ）

などと、独り言を呟きつつ、歩を進める。

「……って、楽観的になってる場合じゃねぇ！　僕……俺の生死に関わる問題だ！」

（まあ、別に俺がここでのたれ死のうが悲しむ人なんていないからいいんだけどな）

ヒステリックになっては、皮肉げに笑みを浮かべ、コロコロと表情を変えながら、さらに奥へと進んだ。

「おっと、あれは……」

すると、何故か地面から３０～４０ｃｍほど宙に浮いている（正確にいえば、吊るされている）林檎があった

「……やった！　す、数日ぶりの食糧だッ！　この際、なんで浮い

てるかなんて気にしねぇ！」

いつもの少年ならば、当然罠だと警戒したであろう。
しかし疑ってかかる暇も惜しむほど、腹を空かせていた彼は何かにとりつかれたかのように飛びついた。
この少年、馬鹿なのだろうか。

「い～～よっしゃあ！　うむ、では早速、頂きm……」

（あれ？
なんだこの浮遊感は。
……嬉しすぎて、天に召されてるとかか？
洒落にならねぇぞ！）

絶賛落下中であるのにそんなことを考えていられる辺り、結構余裕があるのかもしれない。

「まだ、まだ死にたくなぁぁーーいたっ！　ぐおぉぉぉ……」

深くはないが、浅くもない穴底に尻から着地した少年は、急いで尻をさする。

「ケツがあぁぁぁ！　ふぅ、結構痛いじゃないか……」

辺りに誰もいないのに――穴の中なのだから当然だ――平静を装う少年。
本当に馬鹿なのかもしれない。

「つか、痛いだぁ？　はっ！　また、死に損なったか」

少年は、小さく憎々しげに呟いた。

「しかし、まぬけだなぁ、おい。　しかも、若干深めで出れねぇし。……ま、林檎食べて、寝ますかね」

見れば誰もが、猪を捕らえる為の罠である、と気付く罠に引っ掛かった状況でなお、楽観的だった。

もう、馬鹿で良いのでは。

☆　☆　☆

「う、……思い出しただけで、なかなか恥ずかしい」

（うん、これから気をつけよ。

だがな作者、貶しすぎだろーが）

思い返した少年は、深く反省することにしたようだ。

とりあえず、メタ発言は止めましょう。

「しかし、いい加減出ないと不味いな。……近くに助けてくれる人はいねぇかなぁ？」

期待はしねぇが、な。

都合良くいるはずがないことをしりながら、そう声をもらした。

★　★　★

同じころ、ある少女もまた森の中にいた。

「初めて仕掛けた罠だったんだけど、うまくいったかな？」

初めてにしては上手すぎだわって伯母上様に言われたけど……大丈夫だよね？

そう小さく呟きながら、森深くに進んでいった。

「たしか、ここら辺に仕掛けたはず、なんだけどなぁ……。」

森に入って早、半刻（一時間）。

少女は、未だに見つけられないでいた。

「うーん、間違えたかなぁ……。ん？」

「……思い……けで、なか……しい」

（声？が聞こえる……捕まって騒いでるのかな？）

そう疑問に思い、そっちに足を運んだ。

すると……

「近くに助けてくれる人はいねぇかなあ？」

……そんな声が聞こえてきた

（うん、ここは十八番しかないよね♪

あ、どこで十八番なんて言葉を知ったかは、ひ・み・つ♪）

メタ発言は止めて欲しい。

「ここにいるぞー♪」

はっきりと、自身の代名詞である言葉を、声高々に言い放った。

「って、何処にだよ！」

とツッコミつつも、内心は安堵と驚きで一杯だった

たしか朝方、森に入ったとき晴天だったはずなのに、ほとんど光が入ってこない。

すなわち、木が生い茂っていて、かつ、かなり長く歩いていたはずだから森深くにきている……。

確実に誰もいなくね？

と、判断していたので、当然と言えば当然である。

思考に耽っている少年を尻目に、少女はひょっこりと顔を穴へと出し、口を開く。

「ここだけど」

至極当然、単純明快なことであったのに、何故ツッコんでしまったんだろう、と少年かは少し後悔した。

「どうかしたのー？」

「いや、少し考え事をね。えと、この穴から出たいんだけど、若干深くて出れないから手伝ってくれないか？」

「うん、いいよ♪　ちょっと待っててね」

待つこと、ほんの一時
植物のツル？が、少年の元に落ちてきた。

「それに掴まってね。案外丈夫で切れないから安心してね♪」

「ありがとう」

少年はツルを何度か引っ張り、強度を確認すれば、本当に人一人を吊るしても切れないだろう、と思うほど丈夫だった。
若干の警戒をしつつ、それをつたってよじ登ると、穴から出たところにさっきの少女がいた。

（さっきは光が少なかったから見えなかったけど、かなり可愛いなぁ、おい）

と、少年が内心思うほどの頭に美のつく少女だった。

「ホント助かったよ、ありがとう。えぇっと」

「たんぽぽはねぇ、馬岱ってゆうの！」

これが少年と馬岱との出会いであった。

そして、後に、彼の少年は親友にこう語った。

「この頃かな、俺の掘った深い穴に光が射し込み始めたのは」

と

第二話

日も少しだけ傾き始めたころ、中庭に五人の人物がいた。
うち二人はそれぞれ獲物を携えていた。

（いきなりだが、どうしてこうなった！！）

相対する二人のうち、片方は頭を抱えたくなっていた。

（冗談じゃねぇぞ！
だってよ、目の前で女が十文字槍を振ってるんだが、風を切る音が尋常じゃないんだぜ？）

勿論、槍の刃は潰してあるのだが、そこは最重要問題ではない。
というより、当人にはそんな些細なことはどうでも良いことであった。
一番に気にしているのは、何故闘わないといけないか、それも女と、ということだ。

（まぁ、何度考えても行き着く答えは一つだがな……）

そう考えながら、闘うはめになった原因の女性を睨みつける。
睨まれている張本人は、それを笑顔で受け流している。
どうやら実に楽しみにしているようだ。

１０メートルほど間をあけ対峙し、戦わんと相対しているのは。
穴に落ちていた少年――真名を陽という――と、そこから這い上が

る手伝いをし、ここまで案内してくれた馬岱の従姉妹である馬超であった。

「うっし、準備できたぞ！　さあ、始めようぜ！」

準備運動したほうがいいのでは？
本当に闘いたくない陽はそう問いかけ、無駄と言える時間稼ぎをしていた。
結果、実力を目の当たりにしてしまいさらに頭を悩ませたのは余談である。

「ホントに止めにしませんか？　僕みたいな弱くて、剣を使ったこともない初心者と戦っても楽しくないでしょうに」

「いーや、駄目だ！　母上が強いって言ってたんだ。やるったら、やるぞ！」

（あの女の言うことを信じているのかよ。
まぁ、母親（だったらしい）の言だから当然とも言えるが、本当にやめてもらいたいんだが）

陽はよりいっそう落胆して肩を落とし、深いため息をついた。
すると――

「じゃあ、いくぜ！　ハアァァア！！！！」

「ちょっ、待っ、いやぁぁぁあ！！」

――馬超は真っ直ぐ陽の方へ駆け出した。

何の構えもしてなかった陽は、逃げるより他なかった。

「あっ、コラ、逃げるなっ！」

「いぃいやぁぁだぁぁ！」

真剣勝負になるはずが、鬼の変わらない鬼ごっこになりかわってしまっていた。

☆　☆　☆

一刻前……

二人は森を抜けるべく歩いていた。

一人は軽快だったが、もう一人はおぼつかない足取りだった。

やはり、林檎一つなど気休めにすらならなかったようだ。

「ねぇ、ホントに肩を貸さなくても大丈夫？」

「うん、大丈夫。その気持ちだけ貰っておくよ」

フラフラと歩く様子に、馬岱はちょくちょく気にしてくれているようだった。

だが、森の外まで案内してくれてさえいるのに、これ以上借りを作るのは不味い、と陽は判断し、感謝の言葉を述べるのみに止めていた。

「そういえばさぁ、何であんなところにいたの？」

「いや、まぁ、その……」

（非常に答えにくい質問を……）

そう、陽は心の中で呟く

少し前に思い返していたことなので鮮明に覚えていたが、話すのを遠慮したいほどの失態だったため正確に答えるか否か迷っていた。

しかし、助けられた身分であったので簡潔に事の成りを話すことにした。

「あははっ、バカだねぇ～♪」

満面の笑みでいいのける馬岱。

そこには侮りも呆れの感情もなく、心底愉快そうだった。

馬岱の一言が陽の心に突き刺さる一方で、その笑顔に釘付けになっていた。

「どうしたの？　たんぽぽの顔に何かついてる？」

「いや、ただ笑顔が可愛いな、と」

「……っ！　や、やだなぁ、もう！」

（頬が赤くなってる。

……熱でもあんのか？）

如何にも鈍感らしいことを思考する陽。

馬岱が顔を赤くしたのは、不意討ちの称賛の言葉に免疫がなかった

為だ。
それは、彼女の血筋特有のものである。

「えぇ～と、と、とにかくお腹まだ減ってるんでしょ？」

「いや、問題ない…『ぐぅ～』…こともないです」

慣れないことをはぐらかすように、あからさまに話題を変える馬岱。
それを気に止めず、否定の意をこめたやせ我慢で返事をするつもりが、陽自らの腹の音に敢えなく失敗する。
不様である。

「じゃあさ、家にこない？　伯母上様も歓迎してくれるよ！　伯母上様の作る料理本当に美味しいんだから！」

（伯母……ねぇ）

親はいないのだろうか、この子は伯母の何を知っているのだろうか、何をもって歓迎してくれるといいきれるのか、実際に歓迎してくれるだろうか。
と、黒い思いを一瞬頭に廻らすが、すぐに凪ぎ払われる。
陽の頭の中を占めるはご飯のことばかり。

「お言葉に甘えて行かせて頂きます！」

何故か張り切る陽。
幾分かは足取りが軽くなったようだ。

こんな腹ペコキャラにするつもりはなかったのだが。

★
★
★

意外と近かったらしい馬岱の家のある邑。
何度もいろいろな人に声をかけられながら――実際は馬岱のみに、だが――、奥へとぐんぐん進んでゆく。

「ここがたんぽぽの家だよ」

なんだ、ただの県城か。
少しだけ現実逃避をしたくなった。

（城住みで、かつ見知らぬ奴を勝手に入れられる自由さ。……伯母はかなりの権力者か。
……馬岱もあっち側の人間らしいな）

陽は燻ぶる思いを胸に、馬岱に連れられ、庭を迂回して厨房の裏口にまわる。
其処には一人の女性が立っていた。

「只今戻りました伯母上様！」

「お帰りなさい。罠の方は……失敗したようね」

女性は馬岱の手に何もないことを見て、そう言った。
猪が本当に取れていようがいまいがどちらでも良かったので、そんなに気にすることはなかったようだ。

「猪捕まえるのには失敗したけど、代わりに人間捕まえちゃったよ」

「……捕まえたのってそっちの子？」

「うん♪」

（あん？　こっち見んなよ）

女性と陽は、視線を交わす。
睨むように見る陽に、女性は笑みを浮かべた。

「……蒲公英が初めて捕まえたのは食べないとね」

「えぇっ！」「……は？」

女性のとんでも発言に、心底驚く馬岱と、何言ってるのコイツ、みたいな視線を送る陽。

「冗談よ、冗談♪　大方お腹を空かせてるからって連れてきたのでしょう？」

「……う、うん」

「だったらご馳走してあげないと♪」

そういって女性は厨房に入っていった。
女性を観察する為、口を開かないことにした陽だったが、きつい冗談には嫌でも反応させられることに、少しだけ感心した。

（成る程、厄介だ）

そう、深く思いながら。

「……じゃ、じゃあ中に入ろっか」

あの冗談は馬岱にも効いたらしく、少しだけ気まずそうだった。
陽は気にすることなく黙ってついていった。

★
★
★

「さあ、た～んとお食べ♪」

陽の前の机に、結構な量の料理が並べられる。

（どんな時間配分したらこんなに早く出来るんだよ）

自分自身で作ったとしても、これほどは早くはできないので、心からそう思う。
……涎をだしながら。
だからこんな腹ペコキャラにするつもりは（ｒｙ

「本当にいいんですか？」

「ええ、早く食べないとさめちゃうわ」

「……では、頂きます」

一度合掌する陽。
陽自身、自分がなぜ食べる前に合掌するのかわからないでいるのだ

が。
幾度となく思考してきたことを頭にしまい、料理を口に運んでいく。

（美味い）

そう思いながら、ものすごい速さで消費してゆく。
その速さは隣で食べている女の子に匹敵した。

「かなりあったのに綺麗に平らげたわねぇ～」

「ご馳走様でした」

もう一度合掌する。
量に加え、質も良かったので、陽は心底満足していた。
そこに突然……

「坊主よ、剣をとったことはあるか？」

……違う女性が声をかけてきた。

「ないですけど」

「そうか」

「何か問題でも？」

「いや、問題はないんじゃが、少し思うところがあっての」

う～む、といいながら思考する女性。

陽自身も、何がなんだかわからなかった。
脈略もなければ、剣に触れたこともないのに、先のように声を掛けられたのだから、当然だろう。

「わからないなら闘って貰えばいいんじゃない？」

片付けを終え、戻ってきたさっきの女性が言う。

「ふむ、それもそうじゃのう」

「翠、この後暇だったでしょう？」

「ん？　そういやそうだな」

陽の隣で食していた女の子が反応する。

「だったらこの子と闘ってみなさい」

「はぁ？」「えっ！」

女の子と若干空気になっていた馬岱が驚きの声をあげる。

「この子多分強いわよ♪」

「よっしゃ！ならやるぞ！」

迷わず返事をする女の子。
そうして勝手に話は進み、そして冒頭へと戻る。
実はこの会話、陽は殆ど聞いていなかった。
ずっと、剣についてを考えていたのである。

しかし、強引に連れて行かれ、成り行きを話され、対峙させられたのだった。

逃げる陽、追う馬超。
この後日が暮れるまで続いた。

この時の事を陽は語る。

「あのときの翠姉の目はマジだった」

と

第三話

辺りはすっかり暗くなったころ。
城内の廊下を歩く五人がいた。

「明日だ！　明日は絶対やるからな！」

「丁重にお断り申し上げたいです」

「やるったら、やるからな！」

「嫌です、ホント勘弁して下さい」

「明日の朝またあの中庭だからな！　必ず来いよ！」

「人の話を聞きましょうよ……。絶対行きませんから」

先の一騎討ちで闘えず、不満気な顔を露にしながらも再戦の約束をこぎつけようとすり馬超。
命からがら逃げ延び、疲れきった顔をしながら丁寧に全て断っていく陽。
諦め切れない馬超。
闘いたくない陽。

そこに、不意に助け船が現れた。

「はいはい、そこまでよ！　とりあえず部屋に入りなさい」

「むぅ～」

無理矢理切り上げられたと思った馬超は少々むくれるが……

「明日のことはご飯のあとでゆっくりとね♪」

……船が出されたのは馬超の方であった。

嬉々としている一方で、もう一方は激しく項垂れていた。

★　★　★

「「「「ご馳走様でした」」」」

「お粗末様でした♪」

「やはり牡丹の作る飯は旨いのう」

「ふふっ、料理だけは薊（あざみ）に絶対負けない自信があるわ」

「他でもわしに勝ってみせる癖に料理だけとはよく言うのう。嫌味か？」

「そんなんじゃないわ。他はうかうかしてるとすぐ追い抜かれてしまうほど不安定なものじゃない。内心冷や冷やしてるんだから♪」

熟女どう、オホン……お姉様方で話が弾んでいるようだ。

牡丹と呼ばれた女性は、娘の馬超と同じように、（むしろ娘が真似してるのであろうか）濃い赤色の長い髪を頭の頂点より少し後ろで一つにまとめている。
そして、薊と呼ばれた女性は、薄めの紫の長い髪を後ろで2つに分けている。
二人とも、歳よりも若い雰囲気を持っている。

（それにしても、旨かったなぁ）

そんな二人を気にも留めず、陽は料理の評価をする。
だから、腹ペコキャラ（ｒｙ

（……って何でまた馳走になってんだよ！
逃げにくくなっちまったじゃねーか！
ちっ！　あのとき逃げる好機だったのによぉ……。
あの猪娘、足速すぎなんだよ）

元々の陽のプランでは、昼飯を食べたら目を盗んでとんずらしようと試みていた。
しかし、突然闘わされる羽目に――実際逃げていただけだが――なり、その所為による空腹に身を任せて流されるがままにしていたらいつの間にか……であった。
どうやら流されるのが得意なようである。
馬鹿、ともいえるが。

「そういえばこの子、名をなんというのかしら、蒲公英？」

「あはは、……聞いてなかった」

不意に、牡丹と呼ばれる女性が、蒲公英に問い掛ける。

しかし、今の今まで聞いていなかったと気付いた馬岱からは、渇いた笑い声が響く。

「あはは～、じゃないだろ！全く！」

「それで、なんというの？」

「姓名はありません、訳あって捨てました。ですが、命を助けて頂きましたのでどうか真名の陽、とお呼び下さい」

正直、名前を教えていなかったことを、陽は知っていた。
しかし、これで会うこともないだろう、と考えていた為、敢えて教えようとは思わなかったのだ。
やはり侮れない、と陽は思った。

「そう……わかったわ。私たちも名乗りましょう」

名前を聞けて満足だ、と言わんばかりに笑みを浮かべ、牡丹と呼ばれる口を開く。

「私は馬騰、字は寿成、真名は牡丹よ」

「儂は韓遂、字は文約、真名は薊じゃ」

「あたしは馬超、真名は翠ってんだ」

「蒲公英の真名は蒲公英だよ」

各々で自己紹介する四人。

陽には名前はどうだっていいのだが、いきなり真名は不味くないか、とは思った。

「此方は真名ぐらいしかお礼に渡せるものがないのでお預けしたのですが……よろしいのですか？」

「よろしいのよ♪」

（軽いなおい！）

馬騰による即答にツッコミたくなったが、陽は自制した。

「……わかりました。大切にお預かりさせて頂きます」

（ま、別に構いやしねぇさ。
どうせ会うのは今日かぎりなんだからな）

夜中にでも出て行こうと思っていた陽には、四人の真名など、本当に些細なものだった。

★　★　★

「そう思っていたときもありました」

ある部屋で、独り言を呟いて頭を抱える者がいた。
先ずは、前言撤回からしなければなるまい。
夜逃げは夜するもので、朝にするものではないからである。

今までになかった結構な待遇を受けた陽は、戸惑っていた。
何時も通り逃げるか、否か。

（夜逃げ、ダメ、絶対！）

という温情に対する背徳心や罪悪感。

（夜逃げ？
はっ、違う違う。
俺は帰るだけさ、家と言う名の広大な大地に！）

という無茶苦茶な合理化による夜逃げの正統性。

この2つによる余りにくだらない葛藤の末、結局夜逃げを選択した陽。
早速、扉の取っ手に手をかけ、押すが開かない。
何度も試みるが失敗する。
蹴破ってやろうか、などと一瞬思うが、流石に夜逃げをするに音は立てられまい、と諦め。
さらに、此処までの旅路の疲労、頭をフル回転させた副作用による突然の睡魔。
少しだけ、と寝台に就き睡眠。
起きたらまさかの朝。

という、なんとも馬鹿馬鹿しい展開である。

「お～い、起きてるか～　飯だぞ～！」

突然扉を押し入ってくる馬超に、思考が遮られる。

（ちょっと待て、今馬超は押して入ってきたよな）

陽は、凄く死にたくなった。

★
★
★

そんなこんなで数刻後……

今日もまた、陽は中庭に剣をもたされ、立たされていた。

「お腹が減りました」

「嘘つけ！　さっき食ったろ！」

「ちょっと厠に……「さっきいってただろうが！」……むぅ」

「準備運動は……「もう終えた！」……ぬぅ」

「ああ、もう！　さっさとやるぞ！」

しびれを切らしている馬超。

どうしてもやらないと気が済まないらしい。

「は、初めてなんです！　優しくしてください」

「どこぞの生娘の言葉か！」

まさかの韓遂から突っ込みが入ったことに、陽は少し驚く。
そしてそのまま、なかなかやる人だ、などと意味のわからない評価をした。

陽がまだまだふざけていると、馬超が怒りで震えだした。

（そろそろやめようか）

少し、腹を括った。

「はぁ～～。じゃ始めましょうか」

そう溜め息をつきながら、適当に構える陽。
剣を握ったことすらなかったはずが、自然と寸分の隙もない中段の構えをしていた。

「へぇ～」「ほう」

牡丹と薊は揃って感嘆の声をあげる。
やはり見立て通りだ、と二人は思った。

「あれが初めて剣を持ったやつに見えるか？」

「見えないわね～。どう見たって熟練の剣士の構えじゃない」

「そんなに凄いの？」

馬岱が二人の会話に割り込む。
少しばかり槍術をかじっている為、剣とはいえ興味を惹いたらしい。

「そうじゃのう……翠はもしかすると負けるかもしれん」

「えっ！　お姉様が！？」

韓遂の言葉に、馬岱は驚く。
同じ槍術を習う、自分より遥かに強い馬超が負ける、と聞かされたのだから当然であろう。

「えぇ、そうよ。蒲公英もこの闘いをしっかり見ておきなさい」

「はい！　伯母上様！」

その元気の良い返事のすぐ後に、均衡は破られる。

「ハアァァア！！」

雄叫びと共に槍を携え真っ直ぐ突っ込んでくる馬超。
馬超の流れるような降り下ろし、薙ぎ、切り上げなどの怒涛の攻撃が、容赦なく襲ってくるのが陽の目に映る。
本来ならば、見えるはずのない左目にも、である。

陽は普段、右目でしか世界は見えない。
何故なら、左目は包帯で封じているからだ。
そこに、無いわけではない。
見えすぎるから、封じているのである。

にもかかわらず。
ちょうど馬超の一撃一撃と重なる太刀筋が、陽の左目には見えていた――正確には、瞼の裏に浮かびあがってくるような感覚だった。

それに伴って、ズキズキと左目に痛みが走る。
それに耐えながら、陽は馬超のあらゆる攻撃を全て、避け、反らし、受け流す。
身体が覚えていると言うべきか、頭の記憶が身体を動かして言うべきか。
とにかく、全ての攻撃に対して身体が勝手に動いていた。
それは陽自身もよくわからない不思議な感覚だった。

「あたしを舐めてるのか！」

「……」

一度攻撃の手を休め、下がりながら馬超は言い放つ。
なかなか攻撃しようとしない陽に怒っていた。
しかし、陽は答えない。

「チッ！」

舌打ちをしながら、馬超は一気に距離を詰め、急所である喉元を狙い突く。
その瞬間、今までにない激痛が陽の左目に走った。

中庭に二人立っている。
一方は刃を相手の喉元に突き付けており、もう一方は腕が弾かれ無防備な状態であった。
しばしの静寂のあと、一人が地面に崩れ落ちていった。

剣を落とし、左目を押さえながら。

★　★　★

「知らな……知っている天井だ」

何せ昨日の夜、今日の朝に見たのだから、当然である。

「あっ、起きた？　伯母上様たち呼んでくるね！」

「あっ、ちょっ！」

馬岱の閉めた扉の音が無情に部屋に鳴り響く。

（ちょっとぐらい待ってくれても良くね？）

半ば無理矢理相手をさせらたのだから、もうちょっと労って欲しかったようだ。

闘いといえは、さっきの痛みは何なのだろうか、と陽は包帯の上から左目を撫でる。

（しかし、だ。

ちょっぴり頬が赤かったのは気のせいだろうか？）

一通り考えたが、分からぬことは分からぬ、ということで陽は思考を投げ捨てた。

そして、先程の馬岱に対する思考を始める。

暇つぶしにもなるので、考えることは好きなのだ。

★
★
★

その後、すぐにいつもの四人でやってくる。
そんなに暇なのか、と思わせる出現率だ。

「陽、アナタの武、凄かったわ。その後すぐに倒れたけど大丈夫かしら？」

「……まぁ、異常はありませんね」

「本当にお主、剣を振るったことも、持ったこともないのか？」

「……ありません。嘘を言っても仕方ありませんし」

「本当に初心者に負けたのか……」

質問に簡単に答えていく。
若干項垂れている馬超を、陽は気にしないことにした。

「それで、提案なんだけど。……うちにこない？」

「はぁ？」

「うちで働いてみないかってこやつは聞いてるのじゃ」

「はぁ……」

（コイツ、馬鹿だろ）

若干驚き、そして呆れる陽。

予想外の勧誘に、ついつい余計なことを考えてしまう。

「なんだったら、家族にならない？」

満面の笑みを浮かべる馬騰。

「「「「はぁ！？」」」」

そんな話を聞いていない四人は、満場一致の驚愕だった。

この時のことを、陽は親友に語る。

「あれは俺の人生の中で二番目に驚いたことだった。一番は、お前に会ったことだがな」

と

第三話（後書き）

自己紹介が三話目で、とかｗ

第四話

「……朝、か」

隙間から僅かばかり入ってくる光に、陽は目を覚ます。
その光が疎ましいと思わなかった日はない。
陽は物心つく前から朝が苦手、否嫌いだった。
また明くる日が来たという合図であり、自らの持つ真名と同じ字を持つ、太陽が何よりも嫌いだからであった。
まだ醜態を晒して生きているのか、と問われている気がして。
自らの真名と比較され、見下されているような気がして。

「戯言だな」

毎朝やってくる嫌悪感を振り払い扉に手をかけて引く。
さすがに1週間前と同じ過ちは犯さないさ、と心で呟きながら部屋から出る。

★
★
★

日課となった剣の鍛練をするために中庭にやってきた陽。
朝の運動にはもってこいであった。
いつも通り——剣の重さと長さに違和感を覚えながらも——ゆっくりと振るってゆく。

自らの記憶を掘り起こすかのように。
剣を振るった記憶などないはずなのに。

（にしても、馬超強ぇよなぁ。
どこからあんな力が女の身体から湧くんですか、っと）

思わず思考してしまう。
馬超との闘いはほぼ全て反射のように身体が動いており、初闘時に勝利を納められたのもカウンターが反射的に繰り出されただけだった。

☆　☆　☆

初闘時……

首への突きが左目に見えた突きと重なった瞬間、それをどう対処してきたのかが、陽の封じている左目に映る。
その対処の仕方を脳で勝手に処理されたのか、身体が勝手に動く。
槍の切っ先を剣の腹の側面で軌道を反らし、左足を退いて半身になり、槍に沿わせたままの剣で槍を弾き、素早く右手のみで剣を相手の首元に突き付ける、という具合だ。
実際には槍ではなく細剣？の情景が映ったのだが、応用が可能だった。

勝敗がつき緊張がぬけると、流れてきた情報の量に脳が耐えきれず、左目の痛みを伴い気を失ってしまったのであった。

☆　☆　☆

（結局、あれは何だったんだ？）

そんなことを考えながら半刻ほど剣を振るっていると、後ろから声がかけられる。

「お兄様、ご飯だよ！」

馬岱が呼んでいた。

これもこの１週間で習慣になったことだった。

馬騰の家族にならないか発言の翌日に、

「お兄様って呼んでいい？」

と聞かれた陽。

早いだろ、と思いながらも悪い気はしなかったのでそう呼ばせていた。

（まぁ、とりあえず飯だな）

そう思い、馬岱の方に向かった。

★　★　★

朝食後、陽は城の一番高いところに来ていた。

馬鹿は高いところが好き、と言うがそういった所以ではない。

生憎、陽は馬鹿ではない。

多分、そう、めいびー。

というより、抜けていると言った方が適切であろう。

「今日で1週間だな」

馬騰の問題発言についてを思う。

完全に思考がストップし戸惑っていると。

「とりあえず今は保留ってことでいいわね？　2週間……いや、1週間ね。1週間あげるから考えて置いてね♪」

と、勝手に決められていくが、有無を言わせない笑顔にコックリと頷いてしまったのだった。

（あれはなかなか怖かったなぁ）

縁に足を外に投げ出して座り、そう小さく呟く。

そして、頭に両肩、腿など計五羽の鳥を留まらせながら思考に耽る。

はたから見れば、なんともコミカルな絵図である。

ここ1週間を振り替えると、ろくなことがない――此処に来るまでとは天と地の差がある――毎日だった、と陽は思う。

馬騰の作る飯を食って、馬超の鍛練に無理矢理駆り出され、韓遂には読み書き、ひいては兵法の勉強をさせられ、馬岱に街に連れ出され。

（……使役じゃないの馬騰だけなんだが）

でも、不思議と嫌ではない、と考える自分に困ったのも記憶に新しい。

正直に言えば、比較的に自由なのでいつでも逃げることができたが、逃げなかった。

否、本当は逃げられなかった。

1、2日目は、ただ飯食らいが出来る、という損得勘定から。

3、4日目は、ここまで世話になったのに、という罪悪感と此処の居心地の良さから。

5、6日目は、どうしてここまで待遇が良いのか、という懐疑心から。

何故、俺を家族にしたいのか。

分別（ふんべつ）出来ない。

何故、俺を家族にする必要があるのか。

理解出来ない。

本当に俺が家族になっても良いのか。

判断出来ない。

わからない、分からない、解らない、判らない、ワカラナイ。

いくら考えても答えが弾き出されない。

（陽、たしか15歳！

六日過ぎたころかな、イライラする！）

ボケたところで、このイライラはなくならなかった。

突然に、理由もわからず優しくされたことと1週間待つと言われてはいたが、普通ではあり得ない待遇に、陽の中で戸惑いと疑問が生まれる。

疑問はいつしか疑念に変わっていく。

心に巣食う闇がそうさせた。

しかし、先の四人と過ごすときは払拭される。

だが、また独りになると、そういう黒い感情が湧き出てくる。

そんなコロコロと変わる自分に、苛立ちを覚えていた。

気付けば、いつの間にか鳥たちはいなくなっていた。

飛び立っていったことに気付かぬほど深く思考していたのか。

はたまた、暗い思考していることを感じとり、恐れ逃げてしまったのか。

「どっちでもいいか」

八つ当たりの対象にしなくて済むなら。

それ程、動物たちは傷つけたくなかったのだ。

それ以降の思考を打ち切り、陽は寝入ることにした。

呼ばれているような気がしたが無視することにした

★　★　★

「お兄様ぁ～」

かなりの声量をあげ、自らの義兄になるやもしれぬ人を探す。
太陽も天高く昇り、いわゆるお昼時であった。

「いつもは、たんぽぽやお姉様、伯母上様、薊様の誰かと一緒にいるはずなんだけどなぁ」

そう呟きながら城内を歩く。
辺りを見回してはまた次へ、と結構必死な彼女の名を、馬岱という。
どうして探しているか、と問われたら、陽を昼食に誘う為である。
が、なかなか見つからない。
……この時点で既に城の上にいる陽に、気付けるはずもなかった。

「仕方ないのかなぁ？」

（今日、だもんね）

小さく溜め息を吐く馬岱。
義兄になってくれるのか、もしくは友達、悪ければ赤の他人になってしまうのか。
それを決めるのが、今日だ。

馬岱としては、本当はいて欲しいと思っている。
強さに対する尊敬と、何故だかわからない絶対の安心感。
それが、離れたくない理由だ。
しかし、それは兄と呼ぶ陽が決めること。
自身が口出ししていいことじゃないと分かっている。

それが、すこしだけ歯痒い。

「ここにいたい！って思ってくれるように手は尽くしてきたつもりだけどなぁ……」

正直、馬岱ら四人の行動に対し、陽はうっとおしいと思っていた。
しかし、呆れか諦めか、はたまた違う感情か。
こんなのも悪くないと思い直している。
馬岱の強引な行動は、かなり良い方に傾いていた。

「蒲公英」

自分を呼ぶ声が聞こえ、後ろを振り向く馬岱。
声の主は伯母の馬騰だった。

「今日はそっとしといてあげなさい」

「でも……」

「蒲公英は、やれるべきことはやったんでしょ？」

「それは勿論だけど……」

馬騰の言葉に目を伏せる馬岱。
そこにどれほどの気持ちがあるのかを推し量れた馬騰は、安心させるように笑む。

「だったら待つだけしかないわ。それに多分大丈夫よ♪」

「ホントに？」

「ええ、私に任せなさい！　だから、昼飯食べなさい、冷めてしまうわ」

「うん♪」

どこからその自信が来るのかは分からないが、伯母の言に従う馬岱だった。

★　★　★

馬超は中庭にやってきていた。
無論、鍛練の為である。

自らの愛槍―銀閃―を振るってゆく。
目前には、最近鍛練に付き合わせた男の姿はない。
また誘おうと思ったが、母様と薊さんに止められたのでやめていた。

「母上や薊さんとは違った強さなんだよなぁ」

思わず呟く馬超。
ここ一週間何度も闘い、勝ってはいるが、体力的なことででしかなく、まだ一本も取れていなかった。
負ける気はしないのだが勝てない、という不思議な感覚を覚える馬超だった。

「まだまだあたしは強くならないと。アイツから完璧な勝利を得る為にな！」

それを為すにも居て貰いたいんだけど、と結構私欲の傾向は強いものの、残って貰いたいという気持ちはあったようだった。

★
★
★

政務をそこそこに、窓縁に右膝を立てて横向きに座り、外を眺めながらちびちびと酒を飲む妙齢の女性がいた。
韓遂である。
昨日まで、毎日一刻ほど座らせ、勉強させていた机を見やる。
そこに、だらけながらも指示したところまできちんとやる男はいない。

「一体、何を考えているのかのぉ？」

それは馬騰に問うたのか、はたまた陽になのか。
あるいはどちらにもか。
どちらにせよ、此処にいない存在から答えが返ってくるはずなどなかった。

「才を無駄にしないためにも、此方にいて欲しいが、……何とも言えん危うさも持ち合わせておるからのぅ。……困ったもんじゃ」

思わず溜め息が漏れる。
字が読め、かつ勉強させた時、驚くほど速く吸収していく陽の才を潰すには惜しいと思っていた。
しかし、人生経験豊富である韓遂は、陽の心の闇に気付いていた。
その為、どっち付かずの状態であった。

「それに、よく似ておる……。それが所為か、義姉上よ」

思いを馳せるは今は遠き人。
空を見上げれば、厚い雲に覆われていた。

「嵐の予感じゃな」

もう一度溜め息を吐いた

★
★
★

「あーあ、昼食い損ねた」

此処にも溜め息を吐く者がいた。
三刻ほど寝ていたであろう陽である。

「さてさて、時間かな」

そう呟いて城を降りていった。
待ち受けるは波乱と知らずに。

この時のことを陽は語る。

「これはあんまり思い出したくない記憶だなぁ」

と

第五話

Ｓｉｄｅ　韓遂

「いつまで続くのじゃ、この下らん言い争いは……」

かれこれ半刻ほど経っておるのに……よく続くのぅ。

「労働力だといって、強引に連れてかれ、働かされ！」

「強引に手をひかれ、連れてかれるなんて何時ものことだったわ…（嫌じゃなかったわね）」

「そのとき、俺は何度鞭でうちつけられたか！」

「私だってあるわ、そんなことぐらい……（主に閨でね）」

「抵抗したら縄で縛られ、何日も放り出され！」

「抵抗したら、縄で縛られ……ぁあ……」

この１週間でほとんど出すことのなかった感情を、これでもかと言うぐらい前に出しておる。

聞いておると、こやつの壮絶な過去がわかる。

それを似ていると言われ、相当腹が立っているようじゃな。

それはまだわからなくもないのだが。

……問題なのは牡丹じゃ！

さっきから聞いておれば、何の話をしておるのだ。
牡丹の漏らす話の内容が怪しすぎるではないか。
明らかに邪なことを考えておるじゃろう。

しかしながら、いくら似ていると言えども、それを重ねて考えてしまうほど、あやつは愚かではないはずじゃ。
なんといっても、儂の義姉やってるのじゃからの。

義姉上よ……本当に一体何を考えておられるのじゃ？

★
★
★

ある一室で舌戦……舌戦？が半刻ほど繰り広げられていた。
対峙しているのは、言わずもがな陽と馬騰である。
陽は顔を赤らめ激昂中。
馬騰は恍惚とした表情で、両手を違う意味で赤くなった頬に手を添え、いやいやといった様子で首を振り、ほぼ自分の世界にトリップ中。
馬岱はそんな二人の間で、仲裁に入るかどうか決めあぐね――正確には隙が見当たらないため――おろおろしている。
馬超は自分の母の言っていることが違うことを意味しているように感じるが、知識として無いものがわかるはずもなく、ぽけーとしている。
韓遂は据えた目で馬騰を見ている。
というカオス的状況であった。

元々、事の発端は馬騰の一言にあった。

曰く、「自分と似ている」と。
陽は昼間の苛立ちも相まって、冷静にはいられず、熱くなっていたのであった。

「てか、アンタ、話聞いてんのか！　っ！！」

思わず発してしまった言葉で陽は気付く。
先ほどからほぼ自分の過去の独白になっていたことに。
この台詞を言わせる為に、わざと反感を買うように立ち回り、ここまで誘導されてしまったことに。
嵌められたことに、沸々と込み上がる怒りを残っていた理性を総動員させて無理矢理押さえつけ、馬騰を睨み付けていた。

「せっかく綺麗な顔してるんだから、そんな形相しないの♪」

「……」

しかめっ面で、無言を決め込む陽。

「ふむ、やっぱり似ているわ……同じといっていいぐらい」

「――っ！！」

眉間の皺はさらに深くなり、眉も一気につり上がる

「…ざけ…なよ……」

「え？」

「アンタと同じだと……ふざけるな！　アンタみたいな幸せ者と俺が、何が似ているだ！何が同じだ！一緒にすんじゃねぇよ！」

二度も似ている、更には同じと言われ本気で腹を立てていた。

「そんなこと言っても、……本当はわかっているでしょう。アナタと私は同じ存在……だから、アナタがそれに気付いていることぐらいお見通しなのよ」

もともと、陽がこの一週間逃げなかったのは、誘いを受けたときに家族となるそれぞれの人物たちを観察し、見定める為でもあった。
そして、馬騰の言う通り陽は気付いていた、いや、感じていた。
馬騰のことを「自分と似たような奴」と。
しかし、それを頑なに認めることを拒んだ。
認めてしまうと、自分と似た奴が自分の近くにいる、という事態に嫌悪感を感じ、そしてその事実に劣等感も感じるからであった。

「……認めねぇ。絶対認めねぇ！」

そう言いながら、左目を隠す為に巻いてある包帯を取り除いていく。
決定的な違いを見せつける為に。

「これがアンタとは違う理由だ！」

隠していた包帯をすべて取り去って左目を開く。
そこにあったのは……

「「……」」「「！？」」

……瞳の黒い目だった。

瞳の色自体は別段変わった物ではなかった。
ただ、右目とは圧倒的に違っていた。
光を入れて、反射させて輝く銀色の右目。
光さえ吸い込み、輝きをみせない漆黒の左目。
片方ずつなら、何ら問題ない目。
右目と左目が相まって、初めてわかる異常。
今で言うところ、オッドアイだった。

「綺麗、だね」

馬岱が頬を朱に染めて声を洩らす。
馬騰と陽の間に居たので、一番近く、見やすい位置にいた。

「……は？」

途端、ズキッ、と。
陽の左目に、この前以上の激痛が走った。

☆　☆　☆

「綺麗な目だね」

「……え？」

「だから、綺麗だって」

「綺麗？　……ちょっと待ってよ。どうして？　……こんなの、おかしい！　この色違いの目が恐ろしくないの？　怖くないの？　お

ぞましくないの？　気持ち悪くないの？」

「そんなこと全く思わないね！　むしろ格好いいな、って思ってる」

「あははは っ。綺麗に続いて、格好いいだなんて……可笑しな人だね、君は。でも、ありがとう」

「へ？何が？」

「初めてなんだ……この目をそんな風に言ってくれる人」

「なんで？　こんなに綺麗なのに？」

「君は本当に可笑しくて、不思議で、変な人だね」

「変じゃないよ～」

☆　☆　☆

（なんだ、今のは。
いつもより……鮮明すぎる。
だというのに相手の顔だけ見えない。
誰なんだろうか？）

記憶から溢れるように見えた映像のようなものに、陽は疑問を持つ。
稀にこの手の夢を見るのだが、鮮明に声などを聞いた覚えはなかった。

「ちょっと、お兄様……大丈夫？」

左目を押さえて、痛みから耐えるように歯をくいしばっている陽に心配の色を見せる馬岱。

「大丈夫……だけど、なんでだ？　この色違いの目が恐ろしくねぇの？　怖くねぇの？　おぞましくねぇの？　気持ち悪くねぇのかよ！？」

とりあえず、さっき小さな自分が小さな少年？に言っていたことを問うた。
それに対して、馬岱は満面の笑みを浮かべ、答えた。

「うぅん、全然！　むしろお兄様によく似合ってて格好いいよ！」

「そうね♪」

「うむ、そうじゃの」

「そうだな」

いつの間にか陽の目の前に周りこんでいた三人も、馬岱の言に同意する。

「はっ……ははははっ。可笑しな人たちだ、アンタらもアイツも……格好いいだなんて。おかしい……本当に可笑しいよ」

ははははっ、と愉快そうに笑い続ける陽。
両目からとめどなく流れるものを気にもとめずに。

「むぅ～！　たんぽぽたちはおかしくないよぉ～」

当然のことを言っただけなのにおかしい、と言われたことにむくれる馬岱。

「はっ、はは。はっ、はぶっ、ふぐぅっ！」

「笑うなら笑う、泣くなら泣く。どっちかにしなさい」

泣き笑いをし続ける陽は、馬騰にかなり強引に抱き寄せられ、優しい手つきで頭を撫でられる。

ほぼ初めてである母のぬくもりに身を委ね、四対の優しい眼差しに見守られながら馬騰の胸の中でひとしきり泣いた。

この目のお蔭で虐げられ続けてきた苦しみが、全て涙で溢れ出した。

心の中で、この人が母なら、ここにいる人たちが家族なら、悪くないと思った。

ここで終われば良い話だが、それは問屋が卸さない。

「寝ちゃったわね……さて、どうしようかしら」

「牡丹よ、お主は止めて置けよ……何をするかわからんからの、ナニをするか」

「し……ないわよ、息子になったばっかなのに」

「うん？　なんじゃ、今の間は？」

「うっ……かといって薊には渡さないわよ！」

「べ、別に欲しいとは言っておらんわ！」

「ふ～ん」

「ぐっ！」

実は別に寝ていなかったりする陽。
息を整えていただけである。
それを勘違いされ、しかもなかなかタイミングを見出だせず、さらにかなりの力で抱かれている。
遺伝というのは不思議で、馬騰と馬超の髪の色は全然違うのに、胸の発育は似ている。
母親の馬騰の母性は素晴らしいものだ。
よって、ぶっちゃけ陽は窒息しそうなのである。

しかし、馬騰と韓遂の二人はにらみ合いで気付くはずもなく。
そんな二人の様子に馬超はあたふたとしている。

（志なんてないが、半ばで死ぬのか俺は！
頼む！誰か助けてくれる奴はいないのか！）

必死にもがき、偶然、合い言葉？を強く思う。

「ここにいるぞー！」

すると、馬岱が名乗りをあげて二人のにらみ合いに参加。
陽が死にそうだ、ということを伝えにいく。
小悪魔的な笑みを携えて。

★
★
★

結果、助かりはした。
だが、陽に助かった気はしなかった。
何故なら、隣で妹分が寝ているのだから。

（ＨＡＨＡＨＡ！なんてこった！）

意味分からないテンションで頭を抱える陽。
救った代わりに隣で寝かせろ、と要約するとこんな感じの要求をされ、こうなった。
（こうなったら自棄だ！）

結局、馬岱を抱き枕にして寝てしまった。

正直、今の陽に家族――なったばかりだが――と呼べる者のぬくもりが有り難かった。

翌日、馬岱と顔を会わせる度真っ赤にして逃げられたのは余談であるが。

陽はこの時を振り返る。

「今、俺が俺で居られるのは二人、いや家族皆のおかげだ……。本当に感謝してる」

と

第六話

正式に馬家の一員になって――真名も改めて交換し合って――早一週間を過ぎたころ。
陽はまた城の上に登っていた。
前回もなのだが、どう登ったのかは触れないでおこう。

陽がわざわざここにきた理由があった。
それは、新たな悩みが浮上したからである。
陽は悩み、疑問など頭脳労働をするときは一人熟考するタイプなのだ。
故に、一人になりたいのだがこれがなかなかにして難しい。
睡眠以外、ほとんど一人でいる時間がないのである。

半分は納得できた。
何故なら自ら望んだことだったから。
しかし、もう半分はそうではない。

「母さんとの鍛練がキツイ」

陽の義母、牡丹との鍛練こそが陽の新たな悩みであり、一人でいる自由時間が出来ない理由だった。

（何故だろうか？
俺、別に頼んでないのに強制的にやらされているんだよ？）

そう考えてみたが、理由は正直わかっていた。

しかし、今一度原点に戻らないとやるせない気分になってきた陽は、振り返ることにした。

（あれは、薊さんに相談した時からだったかなぁ……）

☆　☆　☆

Ｓｉｄｅ　薊

「母さんの、いえ、家族の皆に恩返し出来るぐらい役に立ちたいです」

「……は？」

「だから、兵法とか、教えてくれませんか？」

儂は耳を疑った。

あれだけやる気のなかった奴がこうまで変わり、あまつさえ教えを乞いに来るとは……。

まぁ、前回は無理矢理だったからの、当然とは言えるのだが。

「ちょ、あのー」

「お、おぉ、すまんの。うむ、心得た。……じゃが、条件が一つある」

「なんです？」

「堅っくるしい言葉使いはやめぬか。家族内での約束でもあったであろうが」

「あ、あぁ、そういやそうでし……だったな～。うっかりうっかり」

額を軽く叩く陽。

なんじゃろう、凄く腹立たしい。

「全く……」

「でもさ、人に頼むときは誠心誠意でするもんじゃないすか？」

「ま、まぁ、それはじゃな……」

むぅ、言いくるめられてしもうた。

この辺りは本当に牡丹と似ているところじゃな。

まぁ、この際じゃ、それは置いておこう。

「よし、では早速やろうではないか！」

「あ、無理矢理話題変えたね」

「う、うるさいわ！」

クスクスと笑っておる。

まぁ、ここは年の功で抑えて……だれじゃ、儂を歳だといったのは！

「……？　まぁ、頼んだ俺もあれなんだけど、積み上がった書簡の山々はどうすんの？」

「……あ」

「あっはっはっはっ。これ借りてきますね～。時間が出来たらまたお願いしますわ」

何冊か持っててていったしまった。
笑われたのは癪に触ったが、まぁ良しとしようではないか。
今はとても気分が良いからな。
何故って、牡丹に自慢出来るのじゃぞ？
フフフ……牡丹の狼狽える様子が容易に想像出来るのう♪

しかし、笑顔を見せてくれるとは……。
一昨日までの奴と同じ人間だとは到底思えんわ。

この日、薊と顔を合わせた者たちは一様に、
「韓遂様の笑みが黒い……」
と言った。

そしてその夜、案の定牡丹の、
「ななな……なんですってぇぇぇえ！！」
と、某未来の特盛金髪ロールばりに狼狽した声が城内にこだましたという。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　陽

そしてその翌日、笑顔だが決して目は笑っていない母さんと出会った。

「役に立ちたいからって、薊を頼ったのね？」

「……まぁ、そうだね」

なぜか薊、の部分を妙に強調させてくる。

嫌な予感はするのだが、事実だから同意で返答した。

「何故私のところに来なかったのかしら？」

微かに額に青筋がたっているのだが、……全くもって意味がわからん。

「それはわかりきってるでしょ。母さんが太守だから遠慮しておいただけじゃん」

母さんこと馬騰は、ここ隴西の太守なのである。

蒲公英の行動から身分というか、立場的にお偉いさんだとは思っていたのだが、まさか太守とは思ってなかった。

毎日飯作って顔見せて、としてたから、どんだけ暇な役職なんだ、と思っていたんだけどな。

それを知ったのも、ここ隴西が涼州のかなり西のほうであることを聞いたのも昨日のこと。

自分自身、こんなに西に来ているとは思ってもみなかった。

「それでもよ！　まぁ、それはもういいわ。……役に立ちたいのよね？」

「……まぁそれは、うん」

「じゃあ、そうね槍を扱えるようになってもらうわ♪」

母さんは満面の笑みだったが、俺は盛大に顔がひきつっていることだろう。

「ここは西涼。漢の領土の北西端に近い位置よ。故に、主に北の匈奴と西の羌からの侵攻を防がないといけないところなの。……たとえ漢に服していても、いなくてもね」

真剣味を帯びた母さんの言葉にうん、ととりあえず首肯する。

「そして、主な戦力というと向こうも同じだけれど、騎兵なの。……ここまで言えばわかるわよね？」

「俺が戦にでるのはすでに決定事項なのね……」

「当然じゃない♪」

わかっていたことだが、一応、肩を竦めておく。

「もちろん、陽の剣の実力には一目置いているわ。……けれどね」

「馬上じゃ使えない、って訳ね。……ハァ」

「そ♪　理解が速くて助かるわ」

すごく頭を抱えたい事態になってしまった。

「さて、早速始めるわよ！　私の息子になった以上、手加減はしないわよ！」

「……政務はどうすんのさ？」

「あんなもの、薊に任せたわ！」

おいおい、本当にそれでいいのかよ。
結構やべーだろ。
つか、勉強の時間が無くなるじゃんか。

「いいのよ、二人で交代してやるから。勉強の時間は無くならないわ」

出来れば、心は読まないで欲しいんだが？

「無理☆　そうね、蒲公英と翠を呼んで、調練場に来なさい」

コイツ、うぜぇw
☆な感じは本気で腹が立ったぞ、このやろう。

三人で向かった後は、俺と蒲公英は基礎固め、翠姉――歳はさして変わらないだろうが、母さんの長女ということでこうよんでいる――は鍛え直しの猛特訓という地獄のような二刻を過ごした。
昼を挟んで、俺と蒲公英（翠姉は逃げた）は薊さんとお勉強会……というより講義？を受けた。
……それから昨日まで一週間、二人からまるで腹いせか、八つ当たりを受けているかのような怒涛の日々だった。

☆　☆　☆

（つか、なんとなくすんなり頭に浮かんだが、地獄ってなんだっけ？）

そう一瞬考えたが、今浮上した疑問も、牡丹の若干正統性を持った、理不尽とも言うべき鍛練と称した暴力さえも、今の陽にはどうでも良かった。

何もかも忘れて、今はこの僅かばかりの休息を享受したいのだ。

現実逃避だ！といわんばかりに、陽はふて寝した。

★　★　★

一刻ほど経ち、城下の騒がしさに陽は目を醒ます。

人々からは、称賛の声があがっていた。

（ま、多分母さんの軍かなんかだろうさ）

心底どうでも良さそうに見下ろしていると、蒲公英が庭を駆けずり回っているのが見えた。

十中八九、自分をを探しているのだろう、と陽は思う。

そういう役回りをいつも蒲公英が担っていたので、そう予想する。

（まぁ、困らない程度に降りてあげますかね。

困った蒲公英を見るのは楽しいんだけどさ）

若干酷いことを考えながら、陽は降りることにした。

★
★
★

その後、蒲公英と合流して玉座の隣の部屋に向かった。
合流時に、
「もう！　お兄様！　あんまりわかりにくいとこにいかないでよね！」
と、陽は怒られた。
高い所に隠れず居るのだから、ある意味滅茶苦茶わかりやすいのだが、城の近くからでは流石に見えないのである。
ということで、とりあえず陽は謝罪することにした。

部屋には既に翠もいた。
そのまま牡丹達が来るまで、陽、翠、蒲公英は待機するしかない。
三人が玉座に入らない……入れない理由はたった一つ。
正式な臣下ではまだないからである。

いくら君主の親類であろうが、一応は兵として段階を踏む。
家族だから、高い身分の血があるから、という理由では、この地で昇進することは不可能である。
外敵からの防衛ラインの前線である地で、そんな甘えは通用するハズがないだろう。

因みに、翠はもう軍に所属しているが、まだ玉座に入れるほどの地位ではないらしい。
それについて、聞いてみた陽。

「あんだけ強いのに、まだ将じゃねぇの？」

「お前に負けたから、下げられたんだよ！」

あともう少しだったんだからな！

と、続いて叫びながら陽を軽く殴る翠。

それは自業自得じゃね？

と思った陽だったが、言葉には出さず、理不尽な暴力を甘んじて受けることにした。

かなり痛そうだったが、こういったスキンシップが陽には嬉しかったようだ。

陽は決してＭではない。

そのようなことは断じてない。

（これは大事な事である）

★

★

★

さらに半刻ほど経ち、牡丹、薊、そして陽の知らない二人が入ってきた。

「あっ、山百合（さゆり）さん、瑪瑙（めのう）、おかえりなさい！」

「山百合、……お疲れ」

「……只今戻りました」

「なーんか、年下から呼び捨てってやっぱしっくりこないわ。それで、翠はボクに対しての労いはないのかしら？」

「うっせ！」

片膝をつき、右の手で握った左手の拳を覆っている、紫紅色の髪を後ろで一つに束ねた者。
据わった目で翠を見て腕を組んで立つ、褐色の髪をツインテールにしている者。
前者は真名を山百合、後者は瑪瑙といった。
勿論、陽は二人を知らず、二人も新たな家族が増えているなど知るよしもなく。

「こいつ誰？」
「この方はどちら様でしょうか？」
「お二方は一体誰なのですか？」

と、三者三様に質問するはめになった。
最初は瑪瑙、自然体に……いや適当に。
次は山百合、少々含みを持った笑みを浮かべて。
最後に陽、丁寧語で笑顔と言う名の仮面で覆って。
端からだと、穏やかな様子に見えるだろうが、居合わせた四人には一触即発なムードにしか見えなかった。

陽は語る。

「二人との出会いは互いに最悪な印象を持ってたなぁ」

と

第六話（後書き）

蒲公英√だというのに、未だ蒲公英成分が少ない、だと……！

第七話（前書き）

遅々として進まねぇ……。

第七話

Ｓｉｄｅ　陽

何とも言えない険悪なムードに、とりあえず母さんが仲立ちとして入った。

「陽。この二人は鳳徳、そして閻行。そして、山百合、瑪瑙。この子は馬白よ」

……あ、そういや俺、馬白ってんだっけ。
母さんから貰ったのは良いが、使う機会が皆無だったから忘れてた。
髪が白いからって理由で名付けた――冗談らしかったが――と言ったときは流石に殺意を覚えた。
本当はきちんと問い詰めて、理由を聞いてやりたい。
けど、どうせはぐらかさらるだけだろうと思ったので止めた。
まぁ、こんな話、今はどうでもいいんだが。

「馬、ですか？」

「そうよ♪」

「……ならば。……私は鳳徳、字は令明、真名は山百合と申します。宜しくお願いいたします」

拳と掌を合わせて一礼する鳳徳さん。
律儀だねぇ。

「ボクは闇行、字は彦明、闇艶なんて呼ばれたりもするわ。どれでもお好きにどーぞ」

心底どうでもよさそうな闇行さん。

難儀だねぇ。

「姓名は母さん……いえ、馬騰より頂きました、馬白と申します。どうか宜しく」

相手も名乗ったことだし、とりあえず自己紹介しておく。

差し障りのない笑顔でも振り撒いておこうじゃないか。

☆　☆　☆

……と、なんとなく昨日のことについて回想に入ってみた。

誰の為にとは聞かないでくれ。

そんで、だ。

俺が鳳徳さんに持った印象は、いけ好かない人、というもの。

まぁ俺の場合、含みのある奴と勘繰ろうとする奴には大抵もつ感情だが。

闇行さんに関しては、嫌な奴だ、と言うか嫌いな部類に入る奴だ、と思った。

俺などどうでもよさそうで、明らかに差別的、侮蔑的な目で見ていた。

散々そういう目で見られていたので、別に表に露にするほどの怒りは感じねぇし、俺はそんなに愚かでもねぇ。

どんな感情も笑顔で全て包み隠す。

それが、この腐った世を生き抜く為に必要なモノなのさ。
なにに対して持論を語ってんだか、俺は。

そんなことはさておいて。
多分、俺が持って印象と同じように思っている二人だろうが、なるべく仲良くしなくちゃならない。

「だって、家族だかんな」

これは母さんの受け売り。
家族は大切な存在よ、と再三言われているもんで染み着いた。
それに救われた俺自身、余程の事がない限り染み抜きはしないだろうし、出来もしないだろう――主に母さんの所為で。

まぁ、黒に垂れ、じわりと広がる白を、染みと言うかは定かではないけど。

★
★
★

そんなことを考えながら、朝日の光も射し込まない中庭で拳を振るう陽。
誰かに教わった訳ではなく、見よう見まねで覚えたので我流の拳法であるが。
これも二日に一回の日課だったりする。
何故早朝、それも日の昇っていないときにやるかというと時間がないのもあるが、何より見せ物ではないからであった。
その後日が昇る頃には、剣の鍛練、朝食を挟んで槍の鍛練へと続く。

（そういや、今日から槍の基礎から基本に移るって言ってたっけ）

と、陽は呟く。

なんにせよ、面倒な母との鍛練があるという事実に、陽は嘆息したかった。

（っと、違うことを考えている場合じゃなかったなぁ）

自らに言い聞かせ、強制的に思考を修正する陽。

鍛練のことも大変悩ましいが、二人との距離の詰め方の方が今は大切だ、と考えた為だ。

（さてはて、何日かかるんだろうかねぇ？）

これからを考え、小さく息を吐いた。

★
★
★

延々と考えているうちに日は昇り。

さらに剣を振るって半刻たち、蒲公英がやってくる。

「なぁ蒲公英……どうしやいいと思う？」

「なにが？」

中庭から部屋に戻るとき、陽は蒲公英に相談してみることにした。

そういや主語が抜けてたなぁ、と思いつつ、二人の事を聞いてみた。

「山百合さんは、寡黙な人だから積極的に話してみた方がいいと思うよ！　蒲公英たちがお兄様にしたようにね♪」

（あそこまでやられると多分きついと思うんだが）

四人で、弓兵が間断なく放つ矢のように自分のところに来られたのは本気で鬱陶しかった――しかしながら、途中からは若干嬉しくなっていたが――ので、そこまではやろうとは思わないが、参考にすることにした。

「んで、閻行さんは？」

「んー……、わかんない♪」

思わずずっこけそうになる陽。

最初は何でも聞いて、みたいな自信のある態度だったのに、分からないとあっけらかんと言われたら、そうなるのも無理はないだろう。

（しかし、思案するときの行動がいちいち可愛いなぁ）

今も口元を人差し指で押さえ、首を傾げる姿になんともいえなくなる陽。

「お兄様？」

「……っ！？」

惚けてていた陽を心配になったか、蒲公英は顔を覗きこむ。

いきなりのことに、ドキッとする陽。

（ったく、不意討ちなんだってばさ！）

「どうかしたの？」

「……何でもない」

「ふ～ん。あっ、瑪瑙のことは薊さんに聞くといいよ♪」

「何故に？」

「瑪瑙は薊さんの娘だからだよ。……義理の、だけれど」

確かに仲がいいな、と思う節もあったがそういうことだったのね、と陽は思った。

★　★　★

そうこうしているうちに、部屋につく。

どうやら陽と蒲公英が最後であった。

陽は静かに謝罪の意で一礼してから席につき、蒲公英は陽のそんな様子に首を傾げながらも席についた。

「皆揃ったわね♪　では、頂きます！」

「「「「「「頂きます」」」」」」

朝と夕は可能であるなら、なるべく家族皆で食事をすること。
食事初めと終わりは声を揃えて挨拶をすること。
この二つは、牡丹がつくった家族間でのルール……鉄則、掟と言っても過言ではないものだった。

Ｓｉｄｅ　陽

「「「「「「ご馳走様でした」」」」」」

「はい、お粗末様でした♪」

食事は滞りなく終わった。
昨日の夜と合わせて、二度目の家族全員での会食。
昨日は全く口を開かなかったけど、今日も、とは流石にいかないのか振ってきたので、不躾にならない程度に答えておいた。

「そうそう、今日は時間ができないから、三人は山百合から指南を受けること。いいわね？」

「うげっ！　山百合のかよ～」

「……翠様、それは挑発と受け取らせて頂いても宜しいでしょうか？」

「うっ！　うぅぅ～、陽！」

翠姉が最初に目についたのが俺のようであるが、我、関せずを決め

込むぜ。
俺には関係ねぇし。
まぁ、とりあえず、目を明後日の方へ向けておこう。
鍛練に向かうときに殴られたのは余談である。

★
★
★

「さぁ翠様、始めましょうか」

「なぁ、山百合、朝のはだな。その、……言葉のあやって奴でな」

「……朝の発言は関係ありません。……半分は、ですが」

中庭の真ん中には、翠姉と鳳徳さんが対峙していた。
翠姉はいつもの十文字槍を携え、鳳徳さんは双戟とでも言うのかね？とにかく、片腕ごとに一本ずつ戟を持って自然体に構えている。
鳳徳さんを見れば見るほど感じるものは一つ。

（強い）

今まで観察していて、立ち振舞いといい、纏う雰囲気といい、そして今の構える姿といい、半端じゃないと思った。
翠姉……御愁傷様です。

Ｓｉｄｅ　三人称

陽が翠に対して合掌した直後に戦局は動いた。
翠から、先ずは一突きと言わんばかりに、鳳徳の心の臓を神速とは言えないものの、それなりに速い速度で突く。
そんな一撃を、両腕の戟を胸の前でクロスし、いとも簡単に防ぐ。
母さんとの1週間の鍛練でここまで変わるのか、と陽が思うほどの重さと速さの一撃を、である

「……翠様、お強くなられましたね。ですが――「うわっ！」――まだ踏み込みが甘いですよ」

たった一撃で、鳳徳も翠の目まぐるしい成長に気付いたようだ。
しかし、簡単には褒めることはせず、更なる力で叩く。
変な自信をつけさせない、傲らせないためである。
ムチが圧倒的に多い、アメとムチの鍛練が鳳徳独特のスタイルである。

その為、白馬の女王様とか氷帝などといった二つ名があったりするとかしないとか。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　陽

半刻後、翠姉の番は終わった。
相当叩かれたようで、真っ白に燃え尽きていた。
おてての皺と皺をあわせて、南～無～。

「死んでない！」

俺ですら元ネタが正直わかってないのにさ、よくツッコめるよねぇ。
こういう場面で使うということだけはなんとなく覚えてたけどな。
ん、間違ってるって？
……しらんがな。
俺の変な記憶にいえや。

「誰と話してるの？」

蒲公英さんや……ヤバい奴見るような目はマジで勘弁してください、
俺の心はガラスでできています。
あれ、ガラスって何？
またか、俺の変な記憶！！
このままじゃ無限ループになり……ループってなんだぁぁぁ！
自爆して、突然頭をぐしゃぐしゃに掻き回す俺を、蒲公英と鳳徳さ
んはひいていたが。
他人なんざ構うものか！

★
★
★

冷静さを取り戻した俺は、楽しい楽しい独り言（泣）を終わらせ、
鳳徳さんの向かいに立った、否、立たされた。
いやいやいや、まだ基礎習ったばっかですよ。
なんでいきなり実践形式！？
と、いろいろ考えながらも表情には出さないが。
ひとえに、人間の学習能力の賜物と言えよう。

「……では、きてください」

「……ハァ」

あんまり乗り気にならないんだけどね……正直面倒だしな。

俺は基礎に習った通りに槍を振っていく。

突き、払い、降り下ろし、このみっちり教わった三つで、相手の急所、鳳徳さんがわざと作っているであろう隙を的確についていく。

「……これならば問題ないですね」

小さく呟く鳳徳さん。

何故だろう、凄く嫌な予感がする……。

★
★
★

鍛練は終わり、昼は適当に食事をすませる。

今はお勉強の時間になるまでのちょっとした休憩。

そういえば蒲公英は、槍の扱いはまだまだだが筋はいい、と鳳徳さんに言われていた。

そのことが良かったか悪かったかは、これからの時代と自分自身の受け取り方次第だけどな。

なんとなく、隣にいる蒲公英の頭を撫でてやる。

ちょっとだけ困った顔をして俺を見上げた後、すぐに笑顔になってくれる。

やっぱり、可愛いな。

乱世の最中でも、この笑顔は無くしたくねぇよなぁ、と漠然と思った。

陽は語る。

「蒲公英に特別な感情を抱いたのは、突き詰めればこの頃からかも知れないなぁ」

と

第八話（前書き）

まだまだ進まない。
ほのぼのが続くぜ！

第八話

「陽、軍に入りなさい」

「俺、まだ槍術基本。ぉk？　軍？　は、問題外」

「却下。師たる私が良いというのだから良いのよ」

「却下は却下だぜ。足引っ張るだけだかんな」

「却下の却下は却下。想定内よ、それは。元から協調性がないことぐらい分かってるから」

「却下の却下の――「えぇい、喧しい！　却下却下五月蠅いわ！」――ぬぅ」

陽の勘は当たってしまった。

いつも通り家族全員で食事を済ませたときに陽は牡丹から通達された。

反論は勿論したが、それも悉く返されてしまい。

陽が折れることで、話は収束した。

陽は盛大に項垂れていたが。

★　★　★

Ｓｉｄｅ　牡丹

元々、山百合たちが帰ってきたら、陽を山百合の率いる部隊に入れることは決めていたんだけどね。
もう少し羌の討伐には時間がかかると思っていたし、陽を鍛えるのにもまだかかるだろうと思っていたのに。
それを山百合が認める程に成長してるなんてね。
……ホント、良い意味で裏切ってくれるわ。
全く、流石私の自慢の息子、としか言いようがないわね♪

「あ、そだ、あれも陽に任せようかしら……」

この私でも出来なかったんだもの、一筋縄ではいかないと思うけれど。
ま、山百合を認めさせるなんてもっと至難の業なんだけれどね♪

「陽～♪　ちょっとおいで！」

顔がひきつっているわ。
全く、失礼しちゃうじゃない♪

★　★　★

Ｓｉｄｅ　？？？

俺は元々、三流とも言えないほどのクズに飼われていた。
そいつは気が短く、気に入らないことがあれば直ぐに他に当たり散

らし、気に入らない奴がいれば殴り、なぶり、そして棄てた。
そんな奴が、俺にだけは決して何もしようとしなかった。
むしろ、可愛がった。
俺がどんなに拒もうとも、へりくだり、貢ぎ、俺に必死で気に入られようとしていた。
俺は世間から賢いと言われている。
他の奴らに劣る気も、引けをとる気もさらさらない。
だからこそ気に入られた。
……願ってもいないクズに。

気持ち悪い！
クズが俺に触れてくれるな！

幾度も、幾日も、幾月もそう思っていた。
そしてそれと同じ回数だけ嘆いた。

何故俺だけ違う！
頼むから解放してくれよ！

と、何度も何度も。
さらに、現実は甘くなかった。

……何故お前だけ。
……お前だけが幸せで。
……お前だけ愛されて。

そんな敵意の篭った目で見られるようになった。

違う！
俺は奴なんかに愛されたくなどない！

俺はこんなところで生きていたくなどない！

と、何度も叫んだ。

しかし、そんな声が届くはずもなかった。

だから、俺は逃げた。

数日数週間かけて、繋がれた縄を食いちぎって。

幸いにも俺は脚が速い。

振り切ることなど容易かった。

だが、外を知らなかった俺は懸けて、賭けて、駆けるしかなかった。

それが一番身を守ることに繋がることぐらいは知っていた。

だがそれも、長くは続かなかった。

疲労の蓄積と満足でない食事は、徐々に身体を蝕んだ。

そして俺は、崩れ落ちるような感覚に陥った。

……その朦朧とした最中で人影を見たのは、何故かはっきりと覚えていた。

どれ程の時間が流れたのだろうか。

俺は人の膝に頭を預けていた。

何故だか不思議と心地がよかった。

「ほれ、やるよ」

今日は朝から何も食べていなかったので、一心不乱に食べてしまった。

あ、あぁ～、俺のがぁ～、という嘆きの声には少し罪悪感を感じた。

まぁ、仕方ねぇなぁ、と呟いた後で。

「ちょっとここを深く入ったとこに水場があるから、後でいけよな」

と、優しく撫でながらそう言ってくれた。

新天地で、あのクズでない人に優しく、慈しむように見てくれるその銀の隻眼が無性に嬉しかった。

「さてと、そろそろいくわ。ま、ちゃんと休むこったな。……そんじゃ、達者でなぁ～」

と言って、行ってしまわれた。

この恩は決して忘れない、と心に刻みこんでおいた。

ふと思えば。

こんなに短時間しか一緒にいなかったのに、もう寂しいと感じてしまっていた。

……ついて行きたい。

そう思った。

だが、それを俺自身が許さなかった。

動けないのがこんなにももどかしいと感じたのは、初めてかもしれない。

しかし、”主”からの初の命令、ちゃんと休め……こう考えると自然と嬉しくなった。

（未来の我が主よ……再び相見えんことを）

俺は天を仰ぎ見た。

それからは、目的をもって走るようになった。
我が主を求め、ひたすらに走った。
そうしたら、ある軍に遭遇してしまった。

「なんだ、こいつ？」

「……さあ」

「十分な体調じゃないようね。……母様たちに任せます？」

「……それが最善でしょう」

抵抗はしてみたものの、弱りきっていた身体には酷なことだった。

☆　☆　☆

そして、今、俺は保護という形でここにいる。
最初、俺には捕らわれている、という風にしか感じられなかった。

一刻も早く主に会いたいのにこんなところで立ち止まっている暇などない！
ここから早くだせ！
我が魂の叫びを聞け！

そう、ずっと思っていた。
だから暴れたりもした。

「誰かが、誰かが私を呼んでいる！」

そこに、まさか反応する奴がいるとは思っていなかった。

★
★
★

「安心なさい♪　捕らえる気なんてないわ。……あなたみたいない子には是非ともいて欲しいのだけれどね」

そう言って、撫でてくれた。
主並の心地良さがあった。
主に似ている、と感じた所為なのかは分からないが。

「心に想い人がいるようね。……まぁ、簡単には諦めないわよ♪」

主を見つけていなかったら、この人を主だとしていたかもしれない。
不覚にもそう思ってしまった。
だから、少しの間だけ留まってみようと思った。
その判断は間違っていなかったと証明される日がこんなに早くやって来るとは思ってもみなかった。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　陽

「だから、痛いっての！」

耳引っ張られるとか、尋常じゃないです、はい。
心底嫌そうな顔をしたのが気に入らなかったらしい。
そんなこと言ったってしょうがないじゃないか！
だってどうせ面倒事だもの。

「ほら、ついた。ちょっと待ってなさい」

俺と母さんと蒲公英と鳳徳さんは、ある小屋のそばにある広場に来ていた。
正確には、俺だけ耳を引っ張られ、連れて来させられたんだがな。
鳳徳さんは保護した責任者として、蒲公英は暇潰しと興味本意でついてきていた。
そして母さんがその小屋へ向かい、俺たち三人は待つことにした。

……因みに、俺と鳳徳さんの間の険悪なムード（？）は、鳳徳さんがある程度認めてくれたことで払拭されたさ。
しかしながら、まだぎこちない感じだから、どちらから口を開く、というのはないけどな。

そうこうしてる内に、母さんがとある馬を引き連れてくる。

あれ、あいつは……。

「……あの馬鹿馬か？」

「ほぇ？　馬は馬鹿じゃないよ！」

「それは知ってる。……知ってるけどさ、俺を生命の危機に追いやった奴を馬鹿と呼ばずしてなんと呼ぶ！」

「生命の危機？　……あぁ～！　じゃあ、あの子がお兄様の食料を？」

「まっ、そゆこったな」

でも食料がなくなってなかったら、森に入る必要もなかったからなぁ。

……だったら全ての始まりはあいつとの出会いからなのかもしれない。

感謝すべきかねぇ？

「あっ、ちょっと待ちなさい！」

母さんの声が聞こえたと思ったら、すげぇ速さで走ってくる奴がいる。

まあ、あの馬鹿馬だけど。

いや、待て。

……その速度でこっち来んの？

止まるどころか、さらに速度あがってますよ？

流石にあせるぞ？

待て待て待て、ぶつかるときのエネルギーって半端ねぇんだぞ！

速度は2乗するんだぞ！

とっさに思い出したやつは知らんが……俺、確実に死ぬぞ！

「ちょっ、とま――ひでぶっ！！」

ちょ、視界が、グルグル、回ってるな。

あぁ、これが、フィギュアスケートのジャンプしてる人の気持ちな

んだろうか。

そろそろ現実逃避はやめ――！

ぐべっはぁっ！！！

地面に叩きつけられる俺。

「いっでぇぇぇえ！！」

無茶苦茶痛ぇ。

あれ、ちょっと待てよ。

……（身体を確認中）。

馬鹿な！なんともないだと！

骨折ぐらいあって然るべきな衝撃だったぞ！

こっ、これがギャグ補正と言うやつなのか！

……何も言うな、俺が一番わかっているから。

そんなことよりさぁ……。

「つか、何で頭突き！？　お前は恩を仇で返すのか！」

ブルッ、と鳴いた。

（そんな気はなかった）

とのことらしい。

え、何でわかるかって？

俺は動物たちの気持ちはなんとなくだがくみ取れるんだよ。

ずっと動物だけが友達のボッチだったからな。

「ふうん、想い人って陽のことだったの」

「想い人ってなんだよ、気持ち悪い。……こいつオスだぞ？」

何時の間にか近くにいた母さんが、変なことを呟く。
生物としての壁を超えさせるだけでなく、男色に靡けというか、この母親は。

「何を馬鹿なことを考えてるかは知らないけど。背を預ける主という意味よ♪」

「……主ぃ？　ちょっとさ、話の飛躍度が半端じゃないんだけど」

「その子に聞いた方が早いと思うのだけど？」

「確かに」

……いや、馬と会話できるのが当然、みたいなこのやりとり、頭おかしいだろ。
まぁいいけど。
とりあえず、聞いてみた。

「それで。どうして俺が主？」

（貴方は命の恩人だ。それに、俺は貴方に惚れた。だから、俺の背を貴方に預けたい。駄目だろうか？）

「惚れた、て……。まぁ、いいか。これから戦場に出ることになる

だろうが、宜しく頼むぞ」

ブルッ！（おうさ！）

俺が応えてやれば、ここ一番の大きな返事をする。

つか、そんなに嬉しいのかよ。

「……この子の名前はどうするのですか？」

……ここに来て、初めて口開いたな、鳳徳さん。

まぁ、問題ないけどさ。

「う～～ん？」

どうしようか。

漆黒の毛……なんつーか、記憶の片隅にある黒〇号ってやつより細いしなぁ。

脚はかなり速く、立派なたてがみ。

……カスケ〇ド？

うん、何故だかわからんが凄くしっくりくる。

しかし、そのまま使ったらいかん気がしてならない。

うむむ、どうしよう。

ま、ここは無難にいくか。

「毛が黒で、兎のように脚が速いから、今日からお前は黒兎だ！」

赤兎馬って、こんな感じで名前つけられた、って聞いたことがある。

我ながらかなり適当だが、喜んでいるようだし、まあいっか。

「一筋縄でいってしまったわね。……つまんな～い」

母さんがふざけたことぬかしてやがったが、ここは抑えてやろう。

戦場の苦楽を共にする、人馬の主従はこんな出会いだった。

陽は語る。

「黒兎は俺の最高のパートナーだな。……しかし、カス〇ードって呼びたいな」

と

第九話（前書き）

今更ですが。
鳳徳の鳳は本来、广に龍です。

でも、ひなりんもこの鳳だし、いいか、みたいな考えです。

第九話

「えーと、私は武官として山百合さんの部隊に入る予定だったと思うんですけど？」

「そうよ」

困惑した様子で質問する者に、淡々と答える。
質問者を見る素振りもない。

「じゃあ、何故太守お側仕え兼侍女みたいなことをさせられているのでしょうか？」

「侍らせておきたいから？」

「何故に疑問形ですか……。で、最も聞きたいのは、この名札の置かれた机と、そびえたつ書簡の山はなんなのですか！？」

「貴方専用の机と、仕事だけど」

「見りゃわかるわ！　じゃなくて、どうして文官みたいなことをさせられそうになっているのかを問うているんです！」

困惑から怒りに一瞬変えるが、それを無理矢理抑えて、あくまで丁寧語で書簡の山を指差して問い詰める。
それに答える者は、満面の笑みを浮かべ、親指をグッと上げてみせた。

「貴方が文官候補だからよ♪」

「その幻想をぶち壊す！」

書簡の山にパンチする。

勿論の如く、大きな音をたてて崩れさった。

「あ、自分で倒したたのは自分で責任持って片付けてね」

「ち、ちくしょおぉぉぉ！！」

今にも泣き出しそうな声色で、しぶしぶ山を積み直し始めた。

今までの一連の流れを演じたのは、言わずもがな陽と牡丹である。

いつも、暇な時間は侍女紛いなことをやらされていた陽であったが、今日初めて牡丹の政務室に来ると、昨日までなかった自分の名入りの机に気付いた。

かねてからの疑問であったこと――何故侍女紛いをやらされていたのか――を共に聞いてみれば。

なんということでしょう、自分の知らないところで役職が増えているではありませんか。

陽はそんな状況を打開する一手を打とうとしたのだが、あっさり返された為、惨めに片付けをしているのであった。

Ｓｉｄｅ　陽

どうしてこうなった！！

何時の間に文官候補になったんだよ。

何時もの一連の流れは。

母さんのお茶を淹れて、母さんからの質問に適当に答えて、ただそれだけの……あっ。

……思い返してみれば、母さんは政治的な質問しかしていなかったっけ。

さらに、たまに書簡まで見せて聞いてきたこともあったような……。

……うん、俺か。

そっ、それでも一言あるってもんでしょ、普通！

「どうせひと悶着あるのだから早いとこ終わらせたかったのよ」

だから心を――

「それに、解るでしょ？　うちは文官が少ないのよ。……一人でも多く良い人材を集めるのが、太守の務めではなくて？」

――ぐぅの音もでません。

流石と言うべきなのか、何と言うべきか。

……真面目な母さんに感服したぜ。

「ほらっ、ぼーっと突っ立ってる暇なんてないわよ！」

「うぃ、了解」

丁寧語は、まぁいいか。

Ｓｉｄｅ　三人称

（面倒くさがりだけど、根は素直なのよね）

黙って席に付いて、仕事を始めだす陽を見て、牡丹は思う。
だからこそ、有無を言わせないように言いくるめたのだが。
その行為が、陽を騙しているようで牡丹は心が痛かった。

しかし、自分は太守。
私情をはさんだ事を言ってはいられない。
文官の数が少ないことは、死活問題だからだ。

（陽はいろいろな面で頭が回るから、きっと解ってくれる……。解って、くれるっ）

だがやはり、内心ではとても歯噛みしたい気持ちだった。
無理矢理に自分に納得させようと言い聞かせても、やはり葛藤は避けられないのだ。
牡丹という女は、どうしようもなく母親だった。

（それにしても、さっきの陽の呆け様はなんだったのかしら？）

嫌なことをこれ以上考えることを止め、ふと思ったことを心で呟く。

（ふふっ、もしかして、母さんに惚れてたり……？
まぁ、冗談か冗談じゃないかは別にして、もっと母さんのかっこいいとこ見せちゃおうかな♪）

牡丹はそれ以上の思考を切り上げ、政務モードの頭に切り替える。
そんな母親の空気の変化を横目で見た陽は、一層真剣に取り組むことにした。

二人が没頭すると、そこには、さらさら、と筆を走らせる音と、時折書簡を積む音だけがするという、異常な空間が形成されていた。
後々聞けば、二人のとんでもない集中力に、侍女たちだけでなく、他の文官たちも入るのをためらったという。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　陽

二刻後、そんなはりつめた空気が霧散する。

「「おっ、終わったぁ！！」」

いや～、やっと終わった。
俺は一山、母さんは三山……とんでもねぇです。
いや、初めてだよ！？
かなりの健闘はしたと自分でも思うんだけど！
すげぇ集中力だったと自分で褒めてあげたい勢いなんですが。
にしても、大分時間経った気がする。
その証拠にほら、日が傾いてきて……あ〝っ。

「あ、あぁぁぁ！！」

そういえば、本日、山百合さんの部隊の召集がかかってたっけか……！
せっかく、最近改めて真名の交換をしたというのに、速攻で信用がた落ち。
……オワタ（、・ω・、）

駄目だ鬱だ死の――
……いや、こんな弱気でどうする！
正当な理由があったのだ！
これを使わない手はない！
俺は、断固として戦うぜ！

さて、と。
……死地に赴くか。

横目で見えた母さんが、どこか笑っているように見えたのは気のせいだろう。

★
★
★

修練場に来ると、たくさんの兵隊さんがいました。
こんなかにはいるのか。
……やだなぁ、出来なくはないけど、集団行動とか苦手なんだよなぁ、俺。

そんなことを思いながら歩いていると、真打ちが登場した（汗）
いやまぁ、ずっと正面にいたんだけどさ。

「……これはこれは一刻ほど前の召集に応じずそのくせそのまた一刻後に急ぐ素振りもなく平然とやって来られる胆力の持ち主の馬白様ではありませんか」

「すいませんしたーー！！」

普段の寡黙さに背反して、息継ぎなしで皮肉る山百合さんに恐れをなした俺は、その場で土下座をし、頭を垂れる。
普段はお淑やかな人がキレると怖いってよくあるよね。

（因みに。
陽が起立状態から土下座までの時間は、約０．５秒。
土下座に入るスピードにタイムレコードをつけるとしたならば、今のところ、１～１０位まで全て陽の名で埋まることとなる。
そう今のところは、だ。
この後に、自分より素早い土下座をこなす君主が現れることなど、陽は思ってもみなかった。
……思っていたら逆に凄いが）

閑話休題

言い訳もなく、誇りもなく、さりとて臆面もなく。
それが俺が土下座する時の三大信条さっ！
いや、表に出さないだけで、バリバリにびびってます、はい。
そんな俺に何を思ったか、一つ爆弾を落とした。

「……いいのですよ、牡丹様から通達はでていましたから」

……。
……えっ？
……ふぅ。
オーケー、もちつけ、俺。
よし、深呼吸だ。
吸って、吸って、吸って……。

「な、ななな、なんですとぉー！！　土下座の意味ねーじゃん！
なんで怒ってます雰囲気醸し出してたかな！？　チクショオォォォ
！！　だから母さん笑ってやいがったのかぁぁぁ！！」

はい、一気に吐き出す！
この、やり場のない感情に、頭を抱えて、かぶり振ってしまった。
周りから見ればとても痛い人に見えるだろうが、気にしねぇ。
……完ッ全に騙された……！

怒りよりも脱力感が半端ねぇ。
騙された自分に溜め息が自然にでるぜ。
これを考えたのは山百合さんじゃなくて、あんのどアホ母親だろう。
野郎じゃねぇが、ざけんな、コノヤロウ！

「……ぷっ……くっく……」

っていうか、山百合さんの肩が忙しく動いている。
……笑ってる？
あの山百合さんが、か？
表情筋が本当に機能してるかわからない人が？
いや、俺の前だけ無表情なのかもしれないけどさ。

見上げつつ覗き込むと、必死に堪えようとしていながらも、笑みがこぼしている山百合さん。
……うん。

「可愛いな」

あ、声に出てしまった。

だけど、それくらい可愛いかったんだよ。
まぁ、日頃の面持ちとの差、所謂ギャップ（だったか？）というものがあったりはするが。

「……ふざけたことを言わないでください」

そう言って、いつもの顔に戻ってしまう。
別にふざけてる訳じゃなく、至極真面目なんだけどなぁ。
元々の顔立ちは、可愛いというより綺麗って感じ。
だけど、今のちょっと幼さも残った笑顔には可愛さがあった、いや、ホントに。

「……本日あなたのやることはありませんですがしっかり見ておくように」

まるで逃げるように、兵たちに号令をかけにいってしまった。
あらら、残念。
まぁしかし、貴重なものが見れたな。
今日は慣れないことしてとても疲れたんだ……役得として貰うぐらいいいだろ？
ま、答えは聞いてないけどね。

★　★　★

Ｓｉｄｅ　山百合

牡丹様や薊様には何度も言われたことはあった。
私の考える男、の中では、あるたった一人の男性だけ、言って頂い

た人がいた。
自覚がありますが、元から愛想が無かったらしく、可愛いと言ってくれたのはその三人と、変態さん達だけでした。

……綺麗だけど、可愛げないよな。
……そうだな、厳しいっつーか、怖いっつーか。
……冷たいんだろ。
……でも、その冷たさがまた。

他の男からは同じようなことを何度もいわれました。
流石に最後の人みたいな人たちは殴っておきましたが。
毎度恍惚とした表情で倒れていくので、根深く記憶に残っています。
その総評により、氷帝、白馬の女王様という別名がついてしまいました（乗っている馬は白なのでわかりますが、女王というのはよくわかりません）。
ついた当初は別段気にも止めませんでしたが、牡丹様が「かっこいいじゃない」と言うので、今は好きだったりします。

とにかく、私の中でのたった一人の男性が亡くなって十余年、私を可愛いと言った者がいました。
新しく家族になった子です。
最初に会ったときは、少々戸惑いました。
あの方に容姿が似すぎていましたから——髪は白く、目付きは悪かったですが。
だから、本能で男を嫌う瑪瑙ちゃんと違って、敢えて距離をおきました。
そうして、人となりを見ようと思ったからです。

結果は、合格です。
真名のように、輝いていて、イキイキとしていました。

しかし、無邪気さの中に冷徹さも垣間見えたのも確かです。
あの子の武は特殊で、冷徹さの集積といっていいほどに、目が、剣筋が、冷たかった。
そこに惹かれ、認め、そして真名の交換さえしました。

そんな子が、牡丹様の手のひらの上で面白いように踊るものだから笑ってしまいました。
そんな最中に不意に言われました――可愛い、と。

あの頃はまだ十代で、慣れない扱いに戸惑いと恥ずかしさがあったのだと思っていました。
ですが、違いました。
慣れなどありませんでした。
柄にもなく焦りました。
とても恥ずかしかった。
でも、どこか嬉しかった。
だから、取り繕いました。
赤面していないか、それだけが心配でした。
そして、逃げました。

あれは、様々な感情からの逃避でした。

兵の指揮を名目に逃げる最中、忙しく辺りを確認しました。
逃げる私を自身で滑稽だと思いますから、見られたくありませんでしたから。
しかし、それ故に他に見ていた方の存在に気付いてしまいました。

「……う……ぁぅ……／／／／」

恥ずかしい。

顔が凄まじいほどの熱をもっているのがわかります。
結果を見るべく、策を考えた人が近くにいることなど、考えればわかることでした。

……。

くっ！　陽君、許すまじ！

Ｓｉｄｅ　三人称

なかなかの逆恨みもいいところなことを考えていたが、その後すぐに山百合は修練場全体に聞こえるように指示を飛ばした。
どうやら将モード切り替えることで、無事に熱を冷ませたようだ。
陽を陥れ、かつ二人の様子を伺いにきていた者、すなわち牡丹は呟いた。

「あとは、瑪瑙ね」

これがまた大変なのよねぇ……、と嘆息した。

陽は語る。

「このときから、長い間ずっと悪寒が止まらなかった」
と

第十話（前書き）

基本的に地の文とかの呼称は、オリ主が真名を預けられたかどうかで変わります。

第十話

「で、なんでボクがアンタなんかに指南しないといけないのよっ！」

「知りません。母さんや薊さんに言いましょう」

「アンタ、母様達を侮辱する気！」

「誰もしてませんよ……」

（凄く面倒くさいです、ありがとうございました）

陽は闇行と共に、先日来た馬小屋近くの広場に向かっていた。
何故なら、闇行の言う通り、陽は馬術の指南を受ける為である。
さらに、闇行が不機嫌なのには理由があった。
それは、
「ボク、アンタのこと嫌いだから」
この一辺倒なのである。

陽と山百合、闇行が会って、そろそろ1週間が経とうとしているが、話をするまでには関係は進んではいるものの、まだまだ闇行との確執はなくなってはいなかった。
話といっても先の程度。
如何に距離が縮まっていないのかが容易にわかることだろう。
その為、なんとか二人の関係の修復を試みようとする牡丹、薊の計画が、今回の馬術訓練に繋がるのであった。

「黒兎～！」

陽は、先日愛馬になったばかりの馬である黒兎を呼ぶ。
呼び掛けに応じ、すぐさま猛然と駆けてくる黒兎。
牡丹が言うに、繋いでおくだけ無駄、とのことで黒兎はほぼ自由なのである。
しかし、陽の命令によって馬小屋で大人しくしているのであった。

Ｓｉｄｅ　陽

相変わらず速いな。
そんなことより、顔面すれすれで止まるのは止めようぜ。
マジで怖いから。
そんなことを訴えながら、首を二回ポンポン、と叩いてやる。
するとブルッ、と黒兎が鳴く。
（では、遠慮なくぶつかれと？）
と聞いてきた。
……何故にそう解釈だよ。
まあ、多分冗談だろう。
そう、思いたい。

「へぇ～、仲がよろしいのね。……本当にアンタには見合わない良馬ですこと」

「ですよね～」

闇行さんは男を下にみる節があるっぽい。
自分より弱い癖に威張ってる奴らがいるというのが癪に障るのだろう。

まぁ、その点に関しては俺には関係ないけどな。
弱くはねぇし、威張ってねぇ。
むしろ、下手下手に立ち回ってやってる。
でも、その姿勢が嫌いっぽいから、本当にどうしようもないんだがな。
……ま、黒兎が俺に見合ってないってのも事実なんだが。

「何笑ってるの、気持ち悪い」

おもっくそひいていやがる闇行さん。
知らず知らずのうちに笑みがこぼれていたらしい。
……自分でも気持ち悪いと思ったんだから世話ねぇぜ。

「とりあえず、乗りなさい」

なんて無茶ぶりだよ、おい。
ど初っぱなからなんのコツとかもなしですか!?
指南者として、それはどうさ。

「百聞は一見に如かず、よ。さっさと乗りなさい！」

なーんて高圧的なんだろうか。
残念ながら、俺は被虐趣味なんてないぞ。
むしろ、こう、なんというか。
闇行さんみたいな高圧的な奴とかだと特に――

「さっさと乗れって言ってるでしょうが！！」

――屈させてやりたい。
どうやら、俺は嗜虐志向、Sらしい。

なんて、アホな思考をしている暇なんざなかった。
ったく、乗ればいいんだろ、乗れば。
馬銜と呼ばれる馬具を黒兎の口につけて乗ってみせる。

「（ふん……格好だけは一丁前ね）　しっかり内腿を使って、しめあげる気持ちで力をいれなさい！　腰掛けるようではダメよ！」

「こう、ですか？」

何故だろう、凄ぇしっくりくるんだが。
懐かしい、訳じゃないんだか、そんな感じ。
どうやったら上手く乗れるのか、そういうのが身体から湧き出る感じだった。

Ｓｉｄｅ　三人称

「黒兎、ちょっとおもいっきり暴れてくれる？」

「ちょっと、何言って！　……うそ……」

闇行は、暴れる黒兎の上に平然と乗り続けている陽に絶句した。
通常数ヵ月、下手をすると一年以上かかることを、たった1日で平気でやってのけたのだ。
驚いても無理はないだろう。

（……そっ、そうよ、黒兎って子が手加減してるだけよ！）

だが、闇行はそのような事態を認めるのを潔しとしなかった。
いくら家族の面々が認めた奴といえど、闇行の前にいるのは、ずっ

と蔑んできた男。
簡単には認めるわけにはいかったのだ。

「いやっ、ちょっ、まっ、こくっ、止まってぇぇぇえ！！」

（限度ってもんがあるだろ！）

そう心で思えば、黒兎はゆっくりと身体を動かすのを止める。
意志疎通って、素晴らしい。

（つかやっべぇな、明日内腿絶対筋肉痛だな、こりゃ）

数分動いてもらっただけだが、既に脚は悲鳴を上げている。
かなりの力を使ったのだろうと思い、明日の自分の体調を心配した。
その中で、ふと思った。

（そういえば、ちょっとした助言以外、何も教えもらってないんだが）

しかしながら、これについては陽が悪い。
馬術に限らず、何に対しても教わる上で過程と段階がある訳だが。
陽は知らずうちにそれら全てを通り越して、最終段階までクリアしてしまったのだから。
それを知らぬ陽は、さらに闇行の神経を逆撫でする。

「闇行さ～ん、教育放棄しないでくださ～い」

「～～～！　……ないわ」

「はい？」

「アンタに教えることなんて何もないわ！」

（え、帰っちまうの！？）

心底憤慨した様子で帰っていく闇行に、何か怒らすようなことしたか、などと陽は考える。

（今更存在自体に、って言われても困るけどな）

そう思いつつ、陽は黒兎をゆっくりと走るよう指示する。

人の感情の起伏にはたまに疎い陽なのであった。

★　★　★

場所は移ってある回廊。

Ｓｉｄｅ　闇行

「なんなのよ、アイツ！」

なんだか無性にイライラする。

下手に出てきて、へりくだった胸くそ悪い女々しい奴かと思ったら、たまに男の癖に意外な一面を見せてくる。

今回もそうだ。

馬をたった１日にも満たない、あの短時間で乗りこなす？

……あり得ない。

そんなことあってたまるか！

「どうかしたのか？」

「あっ、母様……」

うわ、ヤバ……！

よりにもよって母様と会うなんて……。

匙投げたってバレたら怒られる！

「またあやつと何かあったか？」

「……え？」

母様は、優しい言葉で問いかけきた。

……怒って、ない？

「悩みがあるのじゃろ？　それも陽絡みの。……全部顔に書いてあるわ」

「うっ……」

母様は凄い。

分かり易いのもあったかもしれないけど、表情でどんなことを考えているのか、大抵わかってしまう。

「一体、儂が何年お主の親しておると思っておるのやら」

「はいっ！　今年で十年目となりますっ！」

ハッキリとボクは答える。
この十年は、ボクの誇りだから。

「もうそんなになるか……時が流れるのは早いのぅ」

「十年なんて、あっという間でした」

「ほとんど代わり映えのない日々だったからの……と、そうではない！」

話を拗らせるでない！
と言われた。
今の、ボクのせい？

「まぁ兎に角、話してみよ」

ボクはとりあえず、相談にのってもらうことにした。
気概なく話せる唯一に近い母様に、出来事も、思ったことも全て話した。

「ふむ。……羨ましかったのじゃな」

「なっ！　違っ「わないぞ」……」

「その才に嫉妬してしまった。……だから認めたくない。そうじゃろ？」

「……」

図星だった。
そして迂闊だった。
母様は聡明だから、ボクが心のどこかで考えていたことなどわかってしまう。
母様に話したのは間違いだったかもしれない。
ある意味間違ってなかったかもしれないけど。

「まぁ、非凡の身である癖に、あやつは堂々ともしないからの。さらに、自分が非凡であるのをわかってないことがなお性質が悪い」

母様もそう評価するの……。
なんだかムカつく！

「これこれ、嫉妬心剥き出しにするでないわ。……お主はお主、奴は奴じゃ」

少しむくれていると、頭を撫でてくれた。

「お主は儂の大切な娘。そうじゃろ？」

「はっ、はい！」

（因みに。
薊は、そんな愛らしい一面を自分だけに見せる娘のことが、堪らなく可愛いと思ったりしている。
結構な親バカぶりである）

「うむ、よい返事じゃ！　そうしたら瑪瑙、お主は陽のところへ戻れ」

「えー」

「えー、ではない　儂と牡丹の頼み、聞けぬか？」

「うぅ～、わかりましたよぉ～」

母様と……牡丹様、の頼みだから、不承不承ながらやることにする。
せっかく親子水入らずだったのに、水をさされた気分だわ。

陽は、自分の知らぬところで閻行の――些か理不尽である――怒りをかっていた。

★　★　★

変わって広場。

Ｓｉｄｅ　陽

相も変わらず、黒兎を走らせてる。
まだまだゆっくりとした速度だが、大分慣れてきたな。

「暇だなぁ～」

何やりゃあいいのかわからんから、ぶっちゃけ暇。

「誰か暇潰し相手になってくれる奴はいない……」

あ、ヤバ

「ここにいるぞーっ！」

お約束通り蒲公英が表れた。
こういった問いかけをすると、どこから聞きつけたかわからんが、
ほぼ確実にやってくるんだよ。
……凄くね？

「……」

うん、現実逃避は止めよう。
……ヤバいって言ったのは違うんだ！
ほら、あれだ、一応訓練中だから遊んではいけないと思っただけで
あって。
そっ、そうだ、言葉のあやって奴で……！
決して悪意があった訳じゃ――

「どうかしたのお兄様？」

「ごめんなさい」

――すかさずの謝罪だ。
蒲公英は何が何だかわかっていない様子。
俺の罪悪感からの行動だから、わかったら凄いんだけどさ。
ふう、危なかったぜ……。

「……って、えぇぇ！　お兄様、もう馬に乗れる様になったの！？」

今頃気付く？
っていうか。

「そんなに驚くことなのか？」

「う、うん」

マジか。
馬術、ってのは案外難しいもんなんだな。
でも、半日でここまでできちまったぞ？
俺が凄いのか？
うん、やるな、俺。

「さて、続きをやるわよ！」

自分褒めてたら、さっきより不機嫌二割増の闇行さんが帰ってきた。
一度放棄したのに、平然と戻ってるって、どうよ。
ま、反論は認めない空気だから、黙って従うことにするけど。

「ごめんな蒲公英、呼んでおいて。埋め合わせは今度するからな」

「うん！」

さてと、やりますかねー。

陽は語る。

「このとき、自分で言ったのを後悔するとは思わなかった」

と

第十一話（前書き）

ちょっと遅れた。

第十一話

Ｓｉｄｅ　陽

「ちょ、蒲公英、引っ張らないで！　痛い！　マジ死ぬ！」

「お兄様が埋め合わせはする、って言ったんだよぉ～」

「うんっ！　覚えてる！　だから、頼む、手放してくれ！」

「えぇ～！　そんなこと言うの？　たんぽぽ傷ついちゃったな～」

「だったら、俺に合わせて歩いてくれよぉぉ！！」

案の定の筋肉痛です、はい。
その所為で、ただでさえ歩くのもままならないのに、蒲公英さんは手を繋いだ左手を容赦なく引っ張ります。
拷問ですね、わかります。

「ぐおぉぉ……痛ぇ……」

時折止まり、左手は蒲公英さんが放してくれないので、余っている右手で内腿をさする。
マジで黒兎に乗るのキツイ。
内腿で挟みつつ、踏ん張るとか尋常じゃない力がいる。
だから、内腿と腹筋あたりが凄く痛い。
本当に、足腰をもっと鍛えようとつくづく思ったりした。

「大丈夫〜？」

「まぁ、なんとか、な」

蒲公英が顔を覗き込んでくる。
他の部位は別に問題ないしな。

「なら良かった！　じゃ、お兄様、早く早く！」

「そんなに焦ることなんてないだろ？」

「いいから、いいから♪」

何がいいのかさっぱりだ。
まぁいいか。
蒲公英がいいならそれで。
……これで兄貴分らしくなれてるか？

えー、ここで現状の説明だ。
只今俺と蒲公英は街へと繰り出す途中。
前に約束した通り、埋め合わせをする為だ。
本当は、昨日に酷使し続けた筋肉が悲鳴をあげてたから、寝台の上から動きたくなかったんだがな。
しかしながら、蒲公英さんによって手を引かれ強制連行され、今に至ってるのだ。

★　★　★

きゃー、視姦されてるみたい、萎えるぅ～。
（信じたくないことに）有名で名声の高く、人気者である母さん、すなわち馬騰の姪であり、性格的なものも相まってか、蒲公英は人気がある。
そんな蒲公英の隣に男――しかも手を繋いでる――、つまり俺のことが気にならないはずがない。

俺は、そ、そんなに見られたら、感じちゃう、な性癖の持ち主じゃないんで、発情なんてしないが、むず痒くなってくる。
無論、居心地が悪いという意味で、だ。
大体、こういった奇異の目で見られるのが一番嫌いなんだよ。
だから、あんまり往来を歩くのは好きじゃなかったりする。
かといって、――自分で約束した訳だし――蒲公英を無下には出来ない。

べっ、別に蒲公英の為なんかじゃないんだからねっ！
勘違いしないで、自分の言葉に責任を持ってるだけなんだから！

……うん。
瑪瑙さんと真名交換したときの言い回しの真似、なんだが。
……男が言ったら、ただキモいだけだな。
もし金輪際、男でこんなようなことを言うような奴がいたら、問答無用で殴ってやるぜ。

おっと、話がずれた。
まぁ、視線を受けながらも、人間臭いところを半ば強制的に歩かされている。
もう両の指では数えられないほど連れ出されていたから、慣れてる

つもりなんだけどさ。

★　★　★

「お兄様、こっちこっち！」

「ぅん～？」

俺は、それはもう凄まじく振り回されまくっていた。
服屋に入っては物色し、甘味処に入っては冷やかし、また違う服屋に入っては……と、蒲公英がはしごしまくった為だ。
知り合いの人、特にご老体には、時たま声をかけたりもしていたのもある。
蒲公英は、お洒落したいお年頃でありつつも、基本いい子なのだ。
蒲公英可愛いよ蒲公英。

そんなこんなで、俺は黙ってついていっていた。

「ねぇねぇお兄様、似合う？」

「……」

黄緑色の髪留めで横髪をまとめている。（原作でつけてたやつ）
おろした髪のままでも良かったんだが……うん。
なかなかどうして。

「これ買った♪」

似合ってるとは思ったけど、……そんな即決されるほどあっけからんに表情変えた覚えはないんだがなぁ。
つか、意外と高い。

「蒲公英さんや。……ちょっとここでまっててくださいな」

「えぇ～！なんでぇ～！」

「さっきのゴマ団子のおかげで足りません」

まあまあの味だったよ、うん。

「もう、しょうがないなぁ～」

「そんな露骨な反応すんなよな。……多分、すぐに帰ってくるはず？」

「たんぽぽに聞かないでよ～」

母さんに前借りを要求してくる予定だ。
でも、あの阿呆な母親の気分次第で交渉時間が激しく変わってくるからなぁ。

あの阿呆、マジで性格、つか性質が悪い。
聞けば、面白さ第一主義だということらしい。
俺を文官候補にしたの、7割が面白そうだから、だったそうだし。
あの真面目は3割だけだったと聞いた時は、俺の拳は無意識に振り上げられてた。
それに気付いた薊さんに羽交い締めされ、

「無駄じゃ、……諦めぃ」
と諭されたけど。

ハァ、……母さんに借り作るとか、気が遠くなるなぁ。
土下座のみで事足りればいいけどなぁ……。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　三人称

「遅い遅い遅ーーい！！」

蒲公英はほんの少し、ちょーーっとだけ怒っていた。
かれこれ半刻は経っているのにも関わらず、陽が一向に帰ってくる気配がないからだ。
自分の伯母、すなわち牡丹が面白いこと好きなことを蒲公英は知っているが、それを考慮し差し引いていたとしても遅いと感じていた。
そこに……、

「よう、爺さんよ……ただでさえクソ不味いラーメンに髪が入ってるたぁ、どういうつもりだ！」

「アニキの言う通りだ！」

「そ、そうなんだな。美味しかったけど、お金は払えないんだな」

「そ、そんな！」

……それはもう典型的なごろつきが表れた。
蒲公英がいる呉服店の向かい側の、老夫婦が営むラーメン屋でからその声は聞こえた。
蒲公英は、そこの老夫婦と気の知れた仲であるので、ごろつきの自作自演であろうことを確信していた。
だからこそ、この街の長の姪としても、一個人としても、見逃す訳にはいかなかった。

「おじさんたち、言い掛かりは良くないと思うな」

「おじさっ！？　……何が言い掛かりだって？　これを見ろ！」

そこには、しっかりスープまで飲み干された空のどんぶりの底に、黒髪があった。

「（……うわ、わかりやすっ）　でも、これにすぐに気付かないほうがおかしいんじゃない？」

「これでも退かないとは……言葉ではわからないみてぇだな。体に教えこんでやろうか？」

「すぐに暴力で解決しようとする。……これだから脳筋は」

蒲公英は、やれやれと言わんばかりに肩を竦め、リーダー格の男（アニキ）を煽る

「お嬢ちゃん、いい度胸じゃねぇか。……表に出やがれッ！」

四人は大通りと呼べる、呉服屋とラーメン屋に挟まれた路地に出た。

（三人組を誘いだすことは出来た。後は、倒すだけ）

蒲公英はそれだけ考えていた。

★
★
★

その頃陽は猛然と駆けていた。

普段は眼帯で封じてある、黒目を開いて、だ。

実はその目、アフリカ人ばりの視力（５．０）を持っている。

右目だけでは見るに心許ない距離にあるものでも、左目では鮮明に見ることができる。

左目が封じてあるのは、そんな両目の圧倒的な視力の違いに、焦点を合わせるのに目の疲れが激しい等、いろいろ不便だという理由も含んでいた。

その曰く付きの左目によって、かなり遠くから、今の蒲公英の置かれている状況を把握していた。

蒲公英なら多分、そんじょそこらの奴には負けないだろうと、陽は思っている。

だが、陽にとって、家族の誰かに手をあげること事態が許せないのだ。

戦ならそうも言ってられない、と割り切ってはいるが。

「っ！　チェストォォォ！！」

チビが蒲公英に特攻をかけていたのが見えた陽は、スピードを落とさず、蒲公英との距離にして約五歩の地点で踏み切る。
ジャンプ一番で蒲公英を飛び越し、そのままチビの顔面にドロップキックをお見舞いした。

「チビーーー！！！」

陽は無事に着地し、チビは吹っ飛んでいってしまった。

「蒲公英！」

陽はそれを一瞥し、すかさず振り返り左手を出す。
蒲公英は疑問に抱きながらもその手をとった。

「いくぞ！」

「わっ、わわっ」

「てめっ、逃がすか！」

蒲公英の手を引き、駆け出す陽。
いきなりのことに少し慌てるが、なんとか足を運ぶ蒲公英。
それを阻止せんとするアニキ。

「誰も逃げるとは、言ってねぇが――「ひぎゃっ！――あ〝」

突如陽は足を止め、背後から駆けてくるアニキに、右脚の後ろ回し蹴りを放つ。
それはアニキの虚を付けた……そこまでは良かった。

しかし、いかんせん突然だったので蒲公英は止まれず。
繋いでいた左手が前に引かれたことによって、腰のひねりと左脚を軸とした遠心力が十二分ついた踵がアニキの右側頭部に入ってしまった。
陽はちょっとだけ罪悪感を覚えた。

Ｓｉｄｅ　陽

「大丈夫ですかー？」

正直マジで痛そうだな……。
ハッキリ言って、相当な威力だったから、死んでもおかしくはない。
いや、生きてますけどね。
しぶとい。

あ、なんかむさいのきた。

「あ、アニキの仇、なんだな」

「正当防衛だ。……つか勝手に殺してやるなよ」

「え？死んでない？」

「あぁ。だから金置いて、そいつらもってさっさとどっかいけ」

「わ、わかったんだな」

「次はねぇぞ」

金を置いてそそくさ（といっても、デブ体型かつ、のびてる二人引き摺ってるからかなり鈍重だが）逃げていった。

『うおぉぉお！！』
『やるな、兄ちゃん！！』

途端、賞賛の声があがる。
正直うるさい。
こういうの嫌いだし。

「ありがとね、お兄様♪」

「「ありがとうございます」」

「うーん、蒲公英でも出来ることに横槍いれただけなので、感謝される筋合いないんですけどね」

むしろ、邪魔したかもしれんしな。
終わりよければりゃ全て良しだが。

陽の、賊二人をいとも簡単にのした実力と謙虚ともとれる態度に、民衆からの評価もうなぎ登りに上がっていくのであった。

★
★
★

その後。

「お兄様」

って、うおっ。
腕を引かれたことによって、中腰みたいになる。
忘れていた筋肉痛がッ！
おぉう、パネェっ！！

そこに、頬に柔らかい感触とともに、聞き慣れない快音が耳に届く。
蒲公英の頬が若干紅く染まった顔が異様に近いんだがな。
何だったの？

「ホントにありがとね♪」

陽は語る。

「なんだかんだ、町に出るのが楽しみになっていった瞬間だったよ」
と

第十二話（前書き）

シリアス？です。

てか、そろそろ主人公設定とかうPした方が良いのだろうか。

第十二話

ある執務室から出てくる二人。
一方は呆れ、項垂れていた。

Ｓｉｄｅ　陽

「ねぇ、山百合さん　あの人馬鹿ですか？　馬鹿ですよね？　馬鹿だと言ってくださいっ！」

「……本当に馬鹿でしたら、漢から見ればこのような辺境の地、直ぐにでも落とされているでしょう」

「いや、そういうことじゃなくてですね。……百騎で五百人相手にしろとか、おかしいでしょ！」

「……一人五人斬れば良い話です」

「だから、そういうことじゃねぇって！」

「……ならばなんだというんです！」

「なんかキレられた！？　敵より多く兵を揃えるという常識、完全無視ってのがおかしいでしょうが！」

「……たかだか賊五百人ごとき、百騎で十分と判断したのでしょう」

「いや、でも、もっと多く兵を用意して、一気に殲滅で良くないですか？」

「……必要ありません。機動力が落ちますし、それに、百騎中には私と貴方、陽君がいるのです……十分過ぎるでしょう」

「どんな働きを期待してるか知りませんが、俺、一般兵かつ初陣ですから！」

「……関係ありません」

「関係ねぇの！？」

もう僕ちゃんびっくりですよ。

君主が無茶苦茶だったら、家臣も無茶苦茶とか、なくね？

いや、まぁ山百合さんは忠実に従ってるだけだと思うが（むしろそう願いたい）。

それでも、振り回されるこっちの身にもなれってんだ、コノヤロウ。

いや、野郎じゃないんだけど。

今から初陣ですよ？

二人ともももっと労れや。

完全な被害者たる俺が、ちゃんと政務に励んでいたと思えば、これだ。

☆　☆　☆

「山百合、百騎連れて賊五百人の殲滅、宜しくぅ～♪」

「……はっ！　かしこまりました」

「あ、陽もついでにいってきなさい」

「……えぇ～」

「山百合、連行！」

「……はっ！」

「ちょっ――ぐぇ、ぐび、じっ、じまってまずっで」

☆　☆　☆

ついでってなんだよ。
そんなノリで死地に踏み込ませる馬鹿がどこにいる。
そこにいるぞー！だって？
ははっ……殴ったろかボケェ！

★　★　★

Ｓｉｄｅ　三人称

元々、牡丹は早いところ陽を戦場に立たせようと画策していた。

戦場に立ち、どれ程の実力を発揮し、どのような戦功を立て。
――そしてどうやって自分の隣まで登り詰めてくるのか。
楽しみで楽しみで仕方がなかった。

そこへ、偶然にも転がりこんできた、願ってもみなかった賊退治の依頼。
それも、五百人という、測るにはもってこいな人数。
だから、万が一の為に山百合をつけつつも、あえて兵を減らしたのである。

「ふふっ、楽しみね♪　……って、今日の陽の分どうするのかしら？」

自分の右前には、高々と積み上げられた山が三つ。
そして左前方の陽の机には、これまた高く積み上げられた山が一つ。
いくら考えても、自分がやる、という結果しか見えてこなかった。

「……たーすーけーてーあーざーみー（泣）」

執務室にこだます、悲鳴にも聞こえる声。
まるで、の〇太が猫型ロボットを呼ぶような声だ。
されど、援軍が来ることはなかった。

★　★　★

Ｓｉｄｅ　陽

意外と近かったな、おい。

「……鋒矢の陣を敷き、騎馬の勢いを持って一気に蹂躙します」

応、と力強く、きびきびとした声で返事をする皆さん。
ま、俺初陣だし、どうせ比較的安全なとこだろう。
皆さん頑張れｗ
そんなことを考えてると。

「……先頭は馬白で」

馬白……馬白……あ、俺か。
……。

（……って、はいぃぃぃ！？）

危ねぇ、声出そうやった。

……あの、こんな状況の経験者はいますか？
その方に質問です。
実際にこういう状況に置かれたときって、爆笑か、渇いた笑いか、泣くか。
どれがいいんです？

ちょっｗｗおまっｗｗ
みたいにすればいいの？

まぁ、聞いたところでどれもせず、ただ今の様に無表情を作り続けるけどな。

「質問でーす！　何故僕が先頭なんですかー？　この部隊の隊長で

あり、強者である鳳徳様が先頭であるべきではないでしょうかー？」

わざわざ手を挙げて質問した。

流石に、ここでは真名では呼ばねぇさ。

ただでさえ、今はいきなり先頭に抜擢されるということに不信感を抱かれているのだ。

そこに、上官である人の真名で呼ぶなんて無礼な真似、出来るかっ！

つー話だよ。

そして、ここにいる皆が頷いた。

そらそうでしょーね、ふつー。

「……愚問ですね。答えなどわかっているでしょう？」

いや、答えてやれよ……。

皆さんはわかんねぇだろ。

黒兎のせいだってことをさ。

何故って、黒兎さん速すぎるんだもん。

「しかしー」

「……これは決定事項です。異論は認めません」

やりたくない俺は、反論を試みるが、山百合さんは有無を言わせてくれなかった。

ひどい。

これに対して一瞬どよめく皆さんだったが、すぐに治まった。

隊長の――それも将軍中で一番の信のおける（らしい）――山百合さんの命令にこれ以上とやかく言うつもりはないらしい。

……つかさぁ、再三言ってるけども俺、初陣なんだって。
先頭とか死なせる気？
まぁ、死ぬのも一興だけど。
でも、生憎と死ねないんだ。

”死ぬな”

……もう五年ほどにもなる、昔に契った古い古い約束。
俺からの約束は破られたのに、俺は何故か破りたくなかった。
ま、今は関係ねぇわな

★
★
★

人を殺すコト。
それは意外にも簡単だった。
一人目は袈裟斬りで、二人目は喉への突き、三人目は首を跳ね、四人目は、……と二桁殺したところからわざわざ殺し方や殺した数を数えるの止めた。
死んだ奴のことなど、気にしていられなかったからな。
……いや、いちいち気にする必要なんてないんだが。

俺は黒兎の背の上で、ただただ槍を振るえば良いんだからな。
俺の思念を読み、黒兎は動き。
俺が思考しておらずとも、黒兎は動く。
人馬一体と言うべきなのか、黒兎に動かされている、と言うべきなのか。

とにかく今の俺は、俺たちは、負ける気など起きるはずがなかった。

取り残しは、まぁ、後ろに任せますよ。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　三人称

先頭を走って――勿論すれ違う奴らは全て斬り伏せて――いると、陽は見たような奴らを見つけた。
確認すれば、この前逃がした三人組であった。

なんとなく観察してみると、その中のアニキが、この賊どもの頭らしいことがわかった。
気が向いた陽は、逃げようとしていたところを捕まえることにした。
陽が、……再登場早すぎだろーが、と思ったのは余談である。

「って訳で、そろそろ死ぬ？」

「いやいや、どういう訳でだ！」

「そこにいるデブに聞いたらわかるだろ」

「どういうことだ、デク！」

アニキが振り返り、デクに問う。

間違えることなかれ。
デブではなく、デクである。
その間に陽は黒兎から降りた。

「なぁ、兄ちゃん。……また、見逃してくんねぇかな？」

デクから聞き、再び陽の方に身体を向ける。
陽が剣呑な目を向けて、腰に刺さっている――今の状況だと槍より使い勝手が良い――剣を抜いて切っ先を向ければ、アニキは慌てて取り繕う。

「勿論タダでとは言わねぇ！　……何が欲しい？　金か？」

陽は無意識の内に、剣の握る手に力を籠めていた。
アニキは如何に自分の身を守るかで精一杯なのか気付かない。
さらにアニキは言葉を紡ぐ。
……それが自らの首を絞める結果になっているとは気付かずに。

「そうだ！　ご要望とあらば女でもいいぜ？　今いる上玉の奴は皆アンタに回してやるよ！」

「その金と女は、何処で仕入れた？」

「勿論、そこいらの邑からさ」

「ふ～ん」

陽は右手に持った剣を挙げる――ゆっくりと、されど確実に。
その行為は、剣を肩に担ぐ過程であるように見えなくもない。
だが、後ろで見ていたチビとデクは気付いていた。
……明らかに殺める為の動作であると。
しかし、陽の一挙一動にあわせて、凍えるてしまうのではないか、と思えるほどに温度が下がっていくことに。
凍てつき、冷たい陽の右目に、恐れ、声すらもだせなかったのである。

「あっ、アニ……」

ピタリと陽の挙げる剣が止まる。
これ以上は流石に不味いと思ったチビは、懸命に声を上げようとした。
しかし、その瞬間、冷たい殺気が向けられ、口を閉ざしてしまった。
そして、窺うように陽を見た途端、チビは固まってしまわずにはいられなかった。

――射殺さんばかりの、酷く鋭く冷たい陽の右目と目があってしまっては。

「ぁ……ぃ……」

「なぁ、だから、なぁ頼むよ兄ちゃん！」

チビは身震いが止まらず、押し黙ってしまった。
よってチビの声は届かず、まだアニキは気付かない。
そればかりか、アニキはすがるように陽の裾をひき、頭を下げて未だに懇願する。

「頭、上げな」

（へへっ、ちょろいもんだぜ）

そう思いながら、素早く頭を上げるアニキ。
しかし、現実は甘くなかった。

――陽の右目が、それを雄弁に語っていた。

すぐにアニキも動かなくなってしまった。
いや、本当は動けなかった、が正しい。
まるで、本当に凍らさせられたかのように、逃げなければ死ぬ、と頭でわかっているのに、身体が固まってしまっていたのである。

「俺、正直どっちにも興味ねぇから。それに、アンタ前科たっぷりみてぇだし、……死ねよ」

（嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！！
死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！！
だずげで、があぢゃーん！！）

口を開くことさえ出来ないアニキは、心の中で叫ぶ。
しかしその叫び、陽にとっては駄々漏れの言葉だった。
陽にしてみれば、ここまで動揺しきった人の心を見透かすことなど容易だったのだ。

陽が目を鋭く細める。
それにより、一気に温度が下がる。

そして……、

「……ちっちぇえな」

……陽は剣を振り降ろした。

★
★
★

陽は、頭（かしら）であったアニキの首級を持ち、来た道を帰る。
その道は壮絶だった。
全て一太刀で斬り伏せられた死体が、通った道を示すかのように並んでいたのである。

それを成した者。
それは、先頭をひたすら走った者。
名を馬白、真名を陽といった。

この戦いは陽が、”西涼の天狼”として台頭するための前哨戦であるかのように、陽のために用意された独壇場だった。

「なんだか、……虚しいよな」

そう思わねぇか、黒兎。
道中そう声を洩らし、自分の馬に問いかける陽。
されど、今回ばかりは黒兎の嘶く声しか聞こえなかった。

そう。
だから、山百合が、帰ってきた陽に付着した返り血が、陽の涙のように見えたのは見間違いではなかった。

陽は静かに語る。

「初めての戦で、相手は全滅。俺が殺したのは総勢３３人。……意識して数えてた訳じゃなかったのに、未だに覚えてるよ」

と

第十三話（前書き）

また、ちょっと遅れた。

第十三話

Ｓｉｄｅ　陽

憎き太陽から光を受けた満月が、東の空から下界を明るく照らすかのように輝く、俺にとって一番腹立たしい夜。
俺はいつもの城の上に来ていた。
どうやって登ったかは割愛だ。

未だに、騒がしい声がここまで聞こえてくる。
たった百人にも満たない数でのひっそりとした勝利の宴だったはずなのに、この騒がしさはなんさ。
戦後の昂りを鎮める為に酒を飲むらしいが、むしろ酔いによってもっと舞い上がってるんじゃね？
って感じで、俺にはそのノリについていけないというか、合わないし、考えたいこともあったんで、その宴会から抜けてここに来たって訳。
俺と皆さんとの間にはかなりの温度差があったからねぇ……。
正直、皆さんからすると盛り上がりに欠ける奴は邪魔だっただろうから、抜けたのさ。
べっ、別に仲間外れにされた訳じゃないからな！

「ぐへっ！」

……今のは、瑪瑙さんの真似した自分への罰だ。

ま、一番の戦功者である（らしい）俺が抜けてもいいのか、って聞

かれたら、すっげぇ答えにくいんだけどさ。

そんなことはさておいて。

今日、初めて人を斬りました。

自らの手で、殺しました。

まだ斬ったばかりであるかのように、手にはその感覚が残っている。

未だ戦場にいるかのように、血の臭いが鼻にこびりついている。

だが、特に罪悪感に苛まれてはいない。

……その必要すらもな。

どちらかといえば、俺は悪人っぽい考え方だが、別に殺意に任せているから、って訳じゃあねぇ。

誰かを傷つける、斬る、殺すということは、それと等しく自分が、傷つけられる、斬られる、殺される可能性がある。

その因果応報を受け入れる覚悟を俺は持っている。

さらに、殺せば何らかの益に、殺さなければ何らかの不利益を生むであろう奴らを殺しただけだ。

殺すコト＝罪。

俺の頭の中で、この等式は成り立っていないので、なんとも思わねぇんだよ。

――ただ、虚しいと思うが。

だから俺に、罪の意識はねぇ。

かといって、俺自身がやったことが正義だと思っている訳でもねぇさ。

人の見方によって、捉え方が違うだろうけどよ。

大体、ガキの頃、散々いろんな人を――特に俺を利用してきた奴らを――見殺しにしてきているから、罪悪感なんて今更ってやつなんだよねぇ。

あと、俺、基本大人嫌いだから、マダオ（まるでダメな大人）を消すことができるだけ、俺にはむしろ喜ばしい限りだ。

……この人間嫌い、戦時に湧き出た冷たい殺気の根源となっているっぽい。

よくわからんが、なんとなくわかる。

言ってること矛盾してるけどな。

そういうのを改めて考えられた今だからこそ、本当に、蒲公英には驚かされる。

☆　☆　☆

Ｓｉｄｅ　三人称

ときはさかのぼること、二刻前……。

太陽は沈みかけ、西の空は血に染まったかのように、真っ赤に映えていた頃。

陽と山百合を含めた百騎は帰路についていた。

いや、厳密には９８＋１＋１と言ったほうがよいだろう。

九十八騎が前を走り、その後ろに山百合、さらにその後ろを陽が追っているからだ。

行きは、先頭を山百合、九十九騎が後に続く形であり。
戦闘直前に、陽と山百合の位置が代わっただけだった。

では、何故行きとは違うのか。
主に、というか、徹頭徹尾陽の所為である。

陽は、戦が終わっても、アニキ（とついでに二人）を斬ったときの冷たすぎる目と、漏れ出る殺気を抑えられなかった。
陽のその目を見、全身に纏う冷気にも近い殺気を感じた山百合は、一瞬身震いし、怯んだ。
……歴戦の将である鳳令明でさえこの有り様だ。
いくら自分が選抜した九十八騎でも、耐えられはしないだろう。
そう判断した山百合により、隊と陽の間に自分が入る、という今の形に至るのだ。

未だビシビシと背に刺さる殺気に冷や汗をかきながら、山百合は馬を走らせた。

★
★
★

程なくして、城に到着する。
兵のまとめ上げも完了し、戦後処理を皆に一先ず任せ、陽君を連れて玉座に参上しようか、と山百合が思っていると。
そのすぐ先に、珍しく出迎えがあった。
牡丹、薊、瑪瑙に翠、そして蒲公英……家族皆が来ていた。
ほとんどは、陽を気にしているのだと分かった山百合は、いちいち言及することはなかった。

「……今しがた、参上奉ろうかと愚考しておりました。しかしながら御足運ばせる結果となりし我が遅行、どうかお許しを……」

山百合は、片膝を着き、左の拳を右手で包み、頭を垂れる。

「別に問題無いわ。こっちが勝手に出向いただけだし。……しっかしかったいわねぇ～」

「今に始まったことでは無かろうに」

牡丹の呆れを含んだ言葉に対し、薊が答える。

「まっ、そうなんだけどねぇ。　……ところで山百合、……陽、どうだった？」

「……言わずとも、直にわかると思います」

心配するようで、かつ、好奇心を含んだ牡丹の問いかけに、頭を上げて山百合は答えた。

「「どういうこと（／だ）？」」

「翠～、ボクに被せてくるなんていい度胸ね」

「はぁ？　お前が被せてきたんだろ？　あたしの真似して」

「何でボクがアンタに被せなきゃなんないの？　ばっかじゃないの？」

「んだと……っ！」

翠と瑪瑙が同時に尋ねる。
見事にハモってしまった仲の良い二人は、口喧嘩を始めてしまう。

「聞く前に、呼べば早いのになぁ……」

蒲公英は、そんな二人に呆れていた。
……妹分に呆れられる姉貴分ってどうなの、と思ったら負けである。

「……やんのか？」

「ボクに喧嘩を売るなんて、ホントにいい度胸ね！」

二人の口喧嘩が本格化し、どこからともなく武器を取り出し、打ち合いが勃発……

「「――――っ！？」」

……することはなかった。
二人の本能が、無意識に殺気に反応したからだ。

その冷たい殺気が漂ってくるほうに構えれば、山百合がいた。

（山百合さんの殺気はこんなに冷たくはなかったはず）
（じゃあ誰だってんだよ！）
（知るか！　ボクに聞くな！）

共通の敵と判断した二人は、意志疎通をとる。
二人の仲は、喧嘩が絶えることがない程最高に良いが、そのお陰か連携は、他の誰と組むよりはるかに屈強だった。

「……あれ、皆勢揃いでこんなとこで何してんだ？」

「「……へっ？」」

山百合の後ろから、聞こえる声に素っ頓狂な声を上げる二人。

（まさかとは思うけど……陽？）

（あっ、ああ、まさか、な）

（あれ？　どうしたのかしら、翠？　震えてますよー？　……ビビってんの？）

（バッ、そんなんじゃ……。へっ、人のこと言う癖に、自分も震えてるぜ？）

（ボクは翠とは違うの。……そう、これは武者震いというものなのよ）

（ははっ、そうか、そうか）

（……何よ）

（んだよ、やんのか？）

二人は小声でも口喧嘩するという、なんとも珍妙なことをやってのけていた。

いや、むしろ軽口を叩きあっていないと、耐えられそうになかったのである。

陽が一歩近づくごとに漂ってくる、心底まで凍えそうな冷たい殺気に。

「……これほどとはね」

「うむ、お主の全盛期を彷彿とさせるようじゃ」

「あら？　私はまだ現役なのだけど？」

「どの口が言うか。……二年程前から落ちて来ておるぞ」

「まあ、……張り合いがなくなっちゃたからね」

一瞬だけ寂しい目をする牡丹。

「そんなことより、陽ってば、その全盛期とやらの私なんて確実に凌駕しているわよ」

「だったらどうするのじゃ？　あれは流石に不味いぞ？」

薊は、その牡丹の一瞬の変化に気付くも、理由も知っているので、何も言わず流した。
そして、陽についての会話を進めた。

「分かっているわ。そのためにわざわざ私の息子にしたのよ♪」

自分と似ている。

それは、陽の冷たささえ読みきっての発言でもあった。

「よ――「お兄様！」――ムカッ！」

「これ！　姪っ子に怒りを露にするでないわ！」

陽、と言おうとした矢先、その言葉は違う言葉に遮られてしまう。
それをしてしまったのは、蒲公英。
別に狙った訳ではない。

偶然である。

台詞を被らされたことと、先駆けされたことに反応する大人気ない牡丹。

それにすかさずツッコミを入れる薊。

今でこそ、阿吽の呼吸で漫才できる程の間柄だが、それぞれの娘――翠と瑪瑙――の関係と同じく、この二人も実は昔、仲が悪かったりしたのは余談である。

「お兄様！」

もう一度声を上げ、陽を抱き締める――身長差がある為、抱き付くような形になっているが。

「……無理、しないでね？」

「……」

他の面々が、冷たい目に、殺気に、たじろぐ中、蒲公英は臆することなく見上げ、陽の目をきちんと見て訴えかける。

その行為に、陽は思わず声を失ってしまった。

蒲公英の武は未だ完成されておらず、相手の心気を感じることにまだ疎かった為、出来た所業だった。

それを知るところではない陽は、今まで何人たりとも近づけなかったのに、それをいとも簡単にやってのけるとは、と素直に驚いていたのだ。

そうして、陽は心のどこかで、大人びた一面を見せるものの、まだ子供である蒲公英を傷付けることを拒んだのだろう。

不安げに揺らぐ蒲公英の瞳に映る自分を見て、

（……おっそろしい顔してんなぁ、俺）

そう思い、苦笑することで纏っていた冷たい殺気を霧散させることに成功させた。

それと同時に、はりつめた緊張感も消え、翠と瑪瑙は揃って腰をおとし、山百合も、ほっと息を吐いた。

一方、牡丹と薊とはというと。

「私って、何なのかしら。……ぐすん」

「おぉ、お痛わしい限りじゃ」

よよよ、と言わんばかりに泣き崩れる義姉に、慰めの言葉を掛けるの義妹。

といった、かなりシュール光景を形成していた。

☆　☆　☆

場所と時は戻って、再び城の上……。

Ｓｉｄｅ　陽

そういえば、

「何故自ら武勇を奮い、戦い、そして殺すのか」

と、戦功が認められ、玉座に参上したときに”馬騰様”に聞かれた。

戦で人を初めて殺した兵には必ず聞く、という習わしであるらしい。

奴らがやってきた事をやり返してやりたいから。

一般的にそう考えれば、一番楽なのだろう。

しかし、正義面して、やることは同じってのは最高に笑える。

殺しの理由付けとしては、馬鹿馬鹿しすぎるので見当違いだ。

次に、誰々のために、ってやつ。

これも、考えれば簡単なことだろうさ。

だが、求められているって訳でないのに、勝手に、何々の為に、だの、皆の為、とか、責任転嫁にも程があると俺は思ってる。

俺自身、重いの嫌いなんで、

「俺は戦う！何々の為に！」

みたいな殺し文句っていうのか？

――これも不適当だ。

大体、戦うのに理由が必要か？

人を殺すコトに意味を見出だす必要があるのか？

……等々、いろいろ思ったが、建前上、

「馬騰様の歩む道を阻む者を排除したいが為にございます」

と答えておいた。

”母さん”は、すっげぇ胡散臭そうな顔してたよ。

まぁ、正直なところ、ひねくれた頭から弾き出された答えは、今のところ一つだけ。

「置かれている環境の改善」

そう、私的な場で”母さん”に本当のことを伝えた。
そしたら母さんに、そんなところだと思った、などと言われた。
心を読んでいましたよ発言には、もう何も言うまい。

陽は語る。

「俺と蒲公英は、孫策と周瑜の関係にある意味似るのかな？　……ただ、戦によって引き起こされるモノは真逆だし、ヤることで冷めた感情が戻るって訳じゃないけどな」

と

第十四話（前書き）

一限があると、ペースがホントに乱れる。

そんな訳で、また遅れたぜ！

第十四話

「ふっ、やっ、たぁ！」

「……まだまだですね」

三連撃をいとも簡単に避け、いなし、そして弾く。
そして、流れるような反撃をする。

「わっ！？　あっぶな～……。だったら、もっと手加減してくれたってぇ～」

「……良いのですか？手加減しても」

「うぅ～……やっぱ、ダメ！」

「……左様ですか」

片方は、笑顔を僅かに溢すも、また直ぐに真剣な面持ちをして対峙する。
もう一方は、いつになく真剣な顔をして槍を構えていた。
前者は山百合、後者は蒲公英である。

何故二人が――というより蒲公英が――鍛練しているか。
それは、蒲公英自ら山百合に願い出たからだ。
曰く、強くなりたい、と。

先日の賊討伐戦は、牡丹によって無理矢理組み込まれたものであったので、山百合はその分の休暇を得ていた。
正直暇をもて余していたところに蒲公英が教えを乞うてきたので、快く引き受けたのだった。

「……少し休憩にしましょう」

鍛練用の、槍に見立てた棒を杖代わりにしてなんとか立っている蒲公英に声を掛ける。

「……うぅ、疲れたぁ」

その場に座り込む蒲公英。
鋭い一撃ばかりで気を抜くことができないので、その分短い時間でも疲れるのだ。

「……何故今、強くなりたいのです？」

特に焦る必要はないでしょう？
と、山百合は思い、些か唐突に蒲公英に問うた。

確かに、この今にも乱れそうな不穏な世界で確実とはいかずとも、高い確率で生き残る為には、それなりの腕が必要だ。
しかし、蒲公英は既に、訓練された一兵卒を凌ぐほどの実力をもっている。
焦らず、むしろ時間を十分に掛ければ将になれるだろう、と山百合に思わせるほどの資質はあった。
時間を掛けずとも、――今回の様に――質を上げればなんとかなら

ないでもないが、時間を掛けるにこしたことはない。
だから、何故強くなりたいのか。
山百合は理由が聞きたかった。

「……お兄様には内緒だよ？」

指を唇に当ててジェスチャーする蒲公英にコクリ、と山百合は頷く。

「ホントはね、あのとき、すっごく怖かったの」

（……あのとき、とは……？）

と、山百合は思考する。

「お兄様がお兄様じゃない様に見えて、怖かった」

（……あのとき、ですか）

話し始めてからずっと伏し目がちな様子と、ポツリポツリと小さく呟く様子に、山百合は解釈する。
あのとき、とは、陽が初陣から帰ってきたときのことだ。
確かに、戦中、後の陽君は別人の様だったなと、山百合は思い返す。

「目も、いつも以上に鋭くて……。でもね！」

「……でも？」

「どこか悲しそうで、辛そうだった。泣いてる様にも見えたんだ……」

「……」

いつも明るく、元気な蒲公英が陰りをみせる。
浴びた血が陽自身の血涙に見えていた山百合は、無言で頷いた。

「だからね、お兄様の悲しさ、辛さを共有したい、共感したいって思った……、んだけど」

「……だけど？」

それだけの意志だけで今は十分だと思うが、まだあるのか、という疑問に、思わず言葉を復唱する山百合。

「たんぽぽはまだ子供だから、戦にはいけない。けど、あと少しも経てば、戦場に立つ日がやってくるのは分かってる。だからね、そんな時にお兄様の足を引っ張りたくない……むしろ支えてあげたい、助けてあげたい、って思ったの！」

「……！　成る程」

勿論、街のみんなを守りたいって気持ちもあるけどねっ！
と続け、いつも以上の眩しい満面の笑みを浮かべる蒲公英。
好きな人の為に、と、自分の気持ちをこんなにも素直にだせるのか、ここまでのカクゴを持っているのか、と山百合は素直に感嘆する。

（……まだまだ子供だ、と思った私は見誤っていたようですね。
流石は牡丹様の姪……いえ、自らが持つモノに血統なんて関係ありませんか）

知らぬところで成長していた蒲公英を、我が子であるかのように山百合は喜んだ。

「……でしたら、すぐにでも再開しましょう」

「えぇー！　もう少し、もう少しだけ休憩！」

「……強くなって、陽君を支えたいのでしょう？」

「う〝っ……。そっ、それは反則だよ～」

蒲公英は、やっぱり話さなければよかったかなぁ……、と項垂れながらも立ち上がる。

山百合はそんな蒲公英を、少しだけ、ほんの少しだけ羨ましい、と思っていた。

★
★
★

時を同じくして、陽は、というと……。

「ふぁ～……あぁ～、ダルいや暇や平和や、ダルダルビッシュやぁ～♪」

……山百合同様に休暇を貰っていたので、二度寝できたからという非常に微妙な理由で、いつになく上機嫌だった。

いつもの様に日が昇らぬうちに起きた陽だったが、今日は非番だ、と思い返し、やることが特に見つからなかった――日課の鍛錬も、今日はない日だった――ので眠った。

しかし、非番だろうが、勿論のこと朝夕食時のルールは適応される。
……むしろ非番ならば尚更のはずである。
ということで、
「なんでボクがっ！いつもみたいに蒲公英でいいじゃないっ！」
と呟きながら瑪瑙が陽の寝室に赴いた。
……が、寝ている陽を起こさなかった、否、起こせなかった。
寝顔が幸せそうでかつ、可愛いかったから、というなんともベタな理由だった。
いつもとの凄まじいほどのギャップを感じつつも、邪魔してはいけないという感情が湧いたので、そっとしておいたのであった。
そのことにより、現代でいうところの、１０時頃まで惰眠を貪っていたのである。

Ｓｉｄｅ　陽

何もすることがない退屈感が好きですが何か？
長く寝過ぎたときの倦怠感も好きですが何か？
ダルビッシュって誰ですか？
……一体、誰に話しているのだろうか。
まぁ、いいか。

「腹減った」

こんな時間にメシがある訳ねぇだろうなぁ。
久々に作ろうかな。
ずっと主に母さんの料理しか食ってなかったし。
まぁ、母さんの料理旨いからいいんだけどさ。
だが、たまには自分で作るってのも悪くないだろう？

「ということで、やって参りました、厨房です！」

周りに誰もいない。

……なんか寂しい。

さて、朝飯というには遅い、昼飯というにはまだ早いので、仕込みをすることにしました。

……麺打ちからやろうかな。

料理に関して、俺は本格派だ。

やるからには全部自分でやらんと気が済まんタチなのだ。

「……なんもねぇ」

マジでびびった。

野菜がない小麦粉もない肉とかもない。

……なんもできねぇぇえ！！

あぁっと、かろうじて豆腐があった。

……なして？

豆腐だけとか最早意味わからんわ。

いいよもう、……麻婆丼にするから。

ひき肉買いにいってこよ。

★　★　★

母さんとの商談は成立し、お金貰いました。

「その斬新な麻婆丼とやらを私にも作りなさい」

要約するとこんなん。

別に作る分には問題無いんだけどさぁ。

……麻婆丼って斬新か？

などと考えていると、ちょうど中庭にさしかかった。

「あれ？　蒲公英……と山百合さん？」

母さんの執務室から外に行く廊下を通ると、中庭が見渡せる様になっている。

いわゆる、ご都合主義？

とにかく、珍しいと言えば珍しい組み合わせでの鍛練がちょうど終わったっぽい。

「お兄様、どこかいくの？」

あ、蒲公英さんに気付かれました。

別に隠れてた訳じゃねぇけど。

「まぁね。ただの買い物さ」

「たんぽぽも行くー！」

「構わんけど……大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題――「それを言ったらいけません！」――むむっ」

肩で呼吸してるもんだから心配してやれば。

キリッ、って感じで言い出すもんだから、一応遮っておきました。

「ホントに平気か？」

「うんっ！　ぜ～んぜん疲れてないよ！」

「……ならば、もう少し――「さっお兄様、行こっ！」――ふ、仕方ありませんね」

俺の手を取り、逃げるように走りだす蒲公英。

山百合さんが、分かっていたけどね、的な感じで肩を竦めている様子が見えたが、気にしないの方向で。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　？？？

この邑に来たのは久方ぶりだ。

捕らえられないように、わたしの住む村の周りにある村や街、邑を順番に巡っているから、前回来てからずいぶんと間が空いちゃった。

さて、本日の狙いは、っと。

そーだなぁ……、鈍重なデブとか、女連れの優男とか、かな。

そういう奴らからって、すっごく簡単なんだよね。

サクッといっちゃおう♪

そこに丁度、前から、白髪で左目を眼帯で覆っている、少し背が高

めで、穏和そうな雰囲気の男と、少し長めの薄茶の髪を左横で結んでいる、活発そうな雰囲気の少女（といってもわたしよりは2、3歳は上だろう）が仲良く手を繋いで歩いてくる。
いかにも仲睦まじい兄妹、だ。

……関係、ない。
他の兄弟姉妹がどうなっても、幸せを奪う結果になっても。

……関係、ない。
自分の弟の為に、家族の為に、わたしはなんだってしてやる。

男は右手を繋いでいる。
左目が覆われてるから、空いている左側は死角になってる。
まさに、カモがネギを背負っているのに、翼までもがれているような状態だ。
こんな千載一遇の好機、逃す訳にはいかない！

★
★
★

（いつもの様にぶつかって、懐に手を入れ、盗って、平謝りして逃げるだけ）

頭の中で唱え、イメージしながら、少女はその二人組へと足を運ぶ。
顔を俯き気味にし、小走りして、さも、急いでいるかの様に。

「……っと、そうだった」

「……っ！！」

男が左足を半歩翻したことで、左半身に当たりにいっていた少女は当然すかしをくらう。
しかし、ただでは転ばないのが、スリのプロ。
懸命に手を伸ばし、相手の服の裾を掴んで崩れかけたバランスを戻し、懐にもう一方の手を伸ばした。
……が、左腰に刺さる男の剣によって阻まれてしまった。

一般人では明らかに目視不可能な――引っ張られる裾に注意がいくため――手が、動かないはずの剣に阻まれた。
それは、格の違いを意味した。
「……やっぱり、か」

腕を捕られ、バレていたかのような発言に驚愕の色を露にするスリ未遂の少女と、理解が追い付かず思案顔をする、言葉を発した男と手を繋ぐ少女。

「〝スリが辺りで多発している〟ってのは何回か報告にあったけど、まさかなぁ……」

「……どういうこと？」

「んー、母さんがね、〝買い物ついでに、スリ事件解決してきてねー。今回はこの街っぽいから♪〟って言ってたんだよ」

男、すなわち、陽の困ったような声色に、手を繋いだ少女こと蒲公英は、陽に問う。
すんなりとお金を持たされた理由は、ここにもあったのだ。

「まぁ、元々視線には気付いてたけどさ」

（獲物を捉えたような視線にね）

と、心で言葉続ける陽。

スリ未遂の少女は慌てて土下座する。

陽から見れば演技甚だしく、慣れた動きの様だった。

「ごめんなさい！　その、お金……がなくて、貧しくて、日々の食事も儘ならなくて……」

「こんなに肉付きが良くて、顔色が良いのにか？　はっ！　嘘泣きもいいところだ」

涙ぐみながら、ぽつりぽつりと話す少女。

そんな少女に、容赦無い言葉をぶつける陽。

冷たささえ覚えるほど瞳は、少女の心まで見据えていた。

何気に酷い。

しかしながら少女は、気丈にも睨み返していた。

「お兄様っ！」

「……ふっ、わかったよ」

グイッ、と右手を引かれたので、陽はそっちを見る。

そこには怒った顔の蒲公英。

元々、それ以上責める気なかったのか、蒲公英に怒られてなのか。

陽は鋭く冷たい目を止め、少女に笑いかける。

突然のことに、少女は目を丸くした。

「子供は素直なのが一番なんだぜ？」

左手を自分の懐にもっていってある袋を探し、その袋の中のあるものを少しばかり抜き取って服のポケットらしきところに入れてから、少女の目線と合わせるようにしゃがんで袋ごと手渡す。

「ほれ」

「……え？」

そして、手を困惑する少女の頭にもっていき、わしゃわしゃと髪をかき混ぜる。

初めはビクッ、と身体を震わせるが、すぐにくすぐったい感触に少女は身を任せた。

……右隣で羨ましそうにそれを見ているのは割愛である。

「もう、すんなよ？」

「……っ！　うんっ！」

もう一度目を合わせ、少女に説く陽。

暗に次は見逃せない、という意味を込めて。

それをしっかりと感じた少女は、力強く頷く。

厳しさと優しさに触れて、心から改心しようと思ったのだ。

納得した陽は、手を頭からどかす。

そのときの少女の名残惜しむような目には気付かなかったが。

Ｓｉｄｅ　陽

「……見逃してもよかったの？」

「いいさ。無かったことにすれば問題なしだ」

「……たんぽぽ、言っちゃおったなぁ～」

チラリと見るは俺の左手。
よし、撫でてやろう。

「っ！　えへへっ♪」

これで多分大丈夫だ。
確信はないけど。

にしても、見逃すのは流石に不味かったかな？
しかし、睨み返すあの目。
家族の為なら！弟の為なら！
――そんな意志の強い目。

はっきり言って、気に入った。
だから見逃してしまった。

……仕事に私情を挟むのはこれっきりにしよう。
あれは私事に近いから良かったものの。

甘えてはいけない。
そういう世界に――自らの意思でではなくとも――踏み入たんだ。
今更、後には退けない。

さらさら退く気もない。

だったら割り切ろう。

戦は戦、政治は政治、民は民、そして、家族は家族、と。

そして、自らに誓おう。

母さんを必ず支えると。

確かにそれによって、失うこともあるだろう。

だけど――。

今より輝こうとする子供たちを、汚い道に走らすことを留めることができる。

俺にとって一番下らない存在でも、基盤である大人たちが、安心して安定した生産ができる。

今まで柱となってきたご老体を休ませることができる。

――そんな近道となるのだから。

まぁ、結局は自己満足さ。

だから、全て自分の為、だ。

戦う理由は、おかれた環境の改善。

以前、そう言った。

それも突き詰めれば自分の為だ。

半強制的に戦場に立たされるなら、書簡の山の前に立たされるなら、

そんなことをしなくて済むように。

自分が苦労しなくて済むように。

そんな環境にする。

それすなわち、平和な世を作る、ってことになるよなぁ……。

なんて大言壮語。

なんて甘ったれた考え。
……けど、それくらいじゃないと、面白くもなんともなくね？

ま、ただの一武官、ただの一文官の下らない決意さ。
聞き流してくれても、大爆笑してくれてもいい。
家族の皆はどっちもしなさそうだから、話さねぇ。
母さんと薊さんはニマニマと笑い、山百合さんは無表情で笑い、瑪瑙さんは馬鹿にして笑い、翠姉は少し呆れ気味に笑い、蒲公英はいつものように可愛く笑うだろう。
だからこそ、……話さない。

思わないところできっかけを見つけたなぁ。
喜ばしいことではあるけども。

さて、心は決まった。
後は身体、行動で示すだけだ。

……やっとこさ深い眠りにつけそうだ。
やっぱ曖昧は駄目だなぁ、とつくづく思った。
覚悟はあれど、決意は足らず。
そんな曖昧で不安定な心だったから、眠れなかったんだろう。
まぁ、そんなのは今となってはどうでも良いけどな。

とりあえず、まずはひき肉を買わネバダ。
お金だが、一握りだけ抜いて全部あげちゃったんで、ぶっちゃけ足りるかはわからんけど。
ま、母さんのさえ作れば文句は言われんだろう。

おっと……撫で回しすぎた。
目を回している蒲公英が可愛いと思ったのは秘密だぜ？

無事買い終え、作った麻婆丼が大盛況だったのは言うまでもないだろう。

陽は語る。

「まさか麻婆丼から始まって、俺が作った丼物やその他諸々がこんなに流行るなんて思わんかった……。そのお蔭でこっちは大富豪なんだけどな！」

と

第十五話（前書き）

一気に飛びます。

キングクリムゾンってやつですね、わかります。

第十五話

あれからざっと一年あまり……。

俺は武官としてだと、立派かどうかはさておいて、将にのしあがった。

文官としては、上から数えたほうが速いぐらいになっていた。

そうした中で、まさかの軍師にもなっていた。

将軍兼文官兼第二軍師。

……なんつー兼業だよ。

初めに将軍。

正直まあまあだな。

俺は人の命を預かるとか出来ると思っていない。

預かるとか、そんな軽いことが出来るモノじゃねぇだろ？

ってことで、自分の命は自分で責任を持て、と俺は言ってる。

部下の兵たちは、今までに言われたことのないあろうこと言われて、最初は戸惑っていたが、今は見違えるほどに成長した。

求心力も並より上。

つか、俺の隊からは心酔（？）されてる。

上出来じゃね？

次に文官。

かなり上の位置にいる。

……正直言えば、軍師職と被っていなくもないが。

とりあえず、薊さんに比べればまだまだだ。

母さんの次席に勝て、ってのもアレだけどさ。

最後に軍師。
兵法や用兵術が、出来る出来ないで言えば、出来る。
そら将やってんだから、一通りできるさ。
けど、あくまで将軍としてのそれらで、全体を動かすそれらではなかった。
だというのに、一番頭が回るし、軍師いないから、という理由で渋々やってる。

第二、とつけば第一がいるだろう、と思うだろう。
しかし、第一は１０数年ほど前からずっと空いている。
埋まることも、埋めることもないらしい。
だから実質、俺が筆頭軍師ってな訳。
なったからには、と、なかなかにあくどいこともやっている。
所詮は付け焼き刃みたいなもんだがな。
それぐらいしとかないと、ねぇ？

まぁそれにより、五胡相手には――戦略的撤退は省くと――負けは一度だけ。
敗北という味を知っとかないと後々困るだろうから、負けたのは良い経験だ。
賊相手には全勝。
取るに足らないからな。
何故ほぼ全勝できるのか。
詳しくはまたいずれ、だ。

とにかく、そんなこんなで、将軍の俺より軍師の俺のほうが信頼されている。
……困りもんだがな。
死神だの、狼だの、成公英の再来だの、色々言われている。

別に二つ名を気にしちゃいないが、その、成公英とやらは引っ掛かる。
……また今度調べることにしようと思う。

まぁ、こんなところだ。

他の家族の皆はというと――。
母さんは適度にサボりつつ、見つかっては倍に増やされる、という感じ。
薊さんは相変わらず、酒を飲みながらも、義妹として母さんと肩を並べている。
山百合さんは、母さんの右腕をやっている。
瑪瑙（いい加減、さん付け止めろと言われた）は薊さんの右腕として成長しつつある。
翠姉は猪癖は若干あるが、無事将になり、その中でも、かなり上だ。
蒲公英は、俺、そろそろ負けるんじゃね（？）ってぐらいメキメキと実力を付けてきている。

そうそう、実は最近家族増えたんだ。
あのスリ少女と、その弟君。

俺は俺で他の討伐に行ってた時に、賊どもに村が襲われたらしい。
それは母さん直々に殲滅して、村で生存者確認をしたところ、生き残ってたのがその二人だったそうだ。
戦争孤児ということと、俺も気に入ったあの目に惹かれた、とのことで、母さんが家族に、と拾ってきた。
俺もほぼ拾われたに等しいから口に出して言わないけど。
いいのかそれで。
ま、母さんはホント物好きだな、と思うのは悪くないはず。

少女の方は馬休、真名は茜で、弟君は馬鉄、真名は藍だ。
偶然にも付いていた名が休と鉄だったらしいよ？

二人もまた馬家に誘われた身。
今は護身術程度を習っているが、年を経れば本格化するだろうね。
年端もいかない子供を巻き込ませない、という自己満足の為にもがんばらないと、なんてまた思いかえした。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　三人称

一方、その頃の他の恋姫たちはというと……。

義三姉妹は共に旅をしていた。
称して、人助けの旅。
大徳は、盧植の元で勉学を修め、母、劉弘の元を発ち早二年。
筵を売り、時には手を差しのべ、人に笑顔を咲かせる。
賞金首をとっちめることでしか人を救えなかった後の軍神、燕人姉妹はそこに惹かれ、意気投合。
以来、三人で旅をしているのである。

「街なのだ！」

「あっ、待ってよ鈴々ちゃん！」

「……はぁ」

一目散に駆ける末妹。
それを追う長女。
二人に呆れる次女。
美髪公の心労は計り知れない。

「お父上お母上、この趙子龍、乱世に苦しまんとする民の為、いって参ります！」

常山では、新たな決意を胸に、龍が昇らんとしていた。

「はわわ！　しゅ、主席！？」

「あわわ……凄いよ朱里ちゃん！」

「ふふふっ、頑張ったわね」

「はわわっ！　すっ、水鏡先生！　ありがとうございましゅ」

伏龍、鳳雛は師の元で、徐々に才能を開花させていた。

「桔梗さまぁ～……」

「な～んじゃ、もうへばったか焔耶よ！」

「まあまあ、落ち着いて……。根を詰めすぎるのは良くないわ」

「むぅ……ちっとばかし熱くなりすぎたかの」

「そーだよー。焔耶お姉ちゃん、真っ白だもん」

「はっはっは、璃々にまで言われては敵わんわ」

蜀の老た……ゲフンゲフン、お姉さま方と反骨は、案外にのほほんと過ごしていた。

後の魏王は他の誰よりも抜きん出ていた。

……母親である曹嵩さえ差し置いて。

それにより、母が健在していたにも関わらず、家督を継いでいた。

そんな、すでに曹家の看板を背負っている彼女は徐州に来ていた。

「華琳……あなたの覇道、天から見守っているわ」

「はい、お母様」

「春蘭、秋蘭……今更だけれど、華琳を宜しくね」

「はっ！　命を賭けて！」

「お守りすることを誓います」

時代は徐々に、能臣より奸雄を必要としていた。

そして、”曹孟徳”を存分に発揮出来る環境を作るかのように、病が曹嵩を犯した。

そして、今まさに迎えがやってきたのである。

覇王は泣けるはずがなかった。
これが天命、と清々しい笑みを浮かべ、逝った。
そんな母に、むしろ笑いかけたぐらいだった。

「……ごめんね……薊……」

しかし、死す直前にぽつりと洩らした言葉は聞き逃すことはなかった。

「あ～～～っ！　もう嫌！」

「待って！」

王佐の才は、逃げ出した。
しかし、まわりこまれた。
頼み込まれたので仕方なく戻ったが、今日の分を終わらせたら夜逃げでもしてやろうと決意した。
それほどまでに袁家での待遇が悪かった。

「ルールルっ、ルルルルールル♪」

「季衣？呼んだ？」

「ううん、呼んでないよ！」

「じゃあ、今の何？」

「そこのキノコ見てたら口ずさんでた」

「……？」

親衛隊長らは、未だ平和を謳歌していた。

……黒いマッシュルームな形のキノコが引き金とは、悪来は知らない。

「……ぐぅ」

「お嬢ちゃん、寝ないでくれ」

「おぉっ！　寝てませんよー」

「……どの口が言うのやら」

「おうおうねぇちゃん、それは言わぬが吉ってもんだぜ」

「まぁ、いつものことだから慣れたがな。ほれ、飴十本お待ち」

「ありがとうなのですよー」

渦巻の飴。

いわゆる、ペロキャンを買い込む金髪ウェーブの少女と、珍しく鼻血を噴かさず、呆れ顔の眼鏡っ子。

二人は旅に出ようとしていた。

昇り龍と出会う日が来るのはそう遠くないかもしれない。

飴工房があったのは、偶然か、必然か。

それは陽にしかわからない。

「師匠……行って参ります。……約束は必ずや果たしてみせます！」

墓の前で拳と手のひらを合わせ一礼する、銀髪の後ろを三つ編みにする者。

「はぁ～、かっこええなぁ～」

独特の反りを持つ一振の剣と、先が回る構造をした槍を眺め、息を洩らす者。

「むむむ……二人とも、遅いのー！！」

自分の用を早めに済ませたものの、待ちぼうけを食らうはめになり、若干キレ気味の者。

三羽烏もまた、巣立たんとしていた。

江東の虎が死んで早三年。

治めていた地は全て華南に拠点を置いていた袁家に掠め取られ、服していた豪族たちはここぞとばかりに離れた。

家族とも呼べる仲間たちは、分散させられており、未だ虎の子たちは、雌伏の時を過ごしていた。

「あー、いつでもお酒は美味しいわ♪」

「全くもってその通りじゃ！　それを冥琳のやつといえば……」

「ほぉ……続きをお聞かせ願えますかね？」

「「げぇ、冥琳！」」

「穏もいますよー。逃げ場はありませんからぁ～」

後の小覇王と宿将が、勤務時間中に酒を飲んでは呉軍筆頭軍師に見つかり、その弟子に（師からの命令によって）退路を絶たれてはお叱りを受ける。
いつも通りの構図である。

「（もう少しよ、もう少し……母様の宿願、必ず）果たしてみせる」

「聞いているのか、雪蓮！」

「はっ、はい！」

怒る美周郎に正坐する小覇王。
全く以て、何時も通りだ。

「……はぁ」

「蓮華様……休憩にいたしましょうか？」

「っ！　い、いや、必要ない」

「……そう、ですか」

守りの戦では、私を凌ぐ、と現王に言わしめる程の次女は、数知れ

ぬ思いからか、ため息を吐く。
親衛隊長であり友である者は、そんな様子に心配するものの、深くは介入しないでいた。
出来ないでいた、の方が正しいが。

「お～ね～こ～さ～ま～！！」

もう一人の親衛隊長といえば、全力で猫を追っていた。

「ほら、パパ！　お友達、連れてきたよ！」

「おお、この前言ってい、た……」

満面の笑みで、白虎と熊猫を連れてくる弓腰姫。
唖然としすぎて、せっかくのダンディーな顔立ちを崩す孫三姉妹のパパ。
パパとは誰か。
……元々投稿してたサイト様からの登場です。

「……ぅぐ～。月渓様ぁ～、多すぎです……」

もとは武官だったが、次期王に才を見出だされ、ふんどし飛ばされ、早半年。
末娘のもとにいるもう一人の宿将の教えにより、すでに阿蒙ではなくなっていた。
アニメ設定はスルーの方向で。

「おーっほっほっほっ！　国士無双ですわ！」

「やっぱ、世の中博打っしょ！　う～、丁！」

「……麗羽さま～、文ちゃ～ん。そろそろ帰りましょうよ～」

負け続けはするものの、運よく一発逆転の手で、負け分を帳消しにする、金髪特盛縦ロール。

四対六ぐらいで負けてこしているが、それでも博打が大好き女の子。

気苦労絶えないおかっぱ娘。

王佐の才の猫に見限られても不思議ではない。

……この博打処、実は陽が作っていたりする。

「蜂蜜水を持ってくるのじゃ！」

「はいは～い、了解で～す」

南方を治める袁家の長は、いつも通りだった。

本日一回目のおねだり（？）であるので、毒は吐かなかった側近。

……両袁家を、これ以上紹介することが正直ない。

「詠ちゃん……」

「大丈夫よ。月なら出来るわ」

「うん。……頑張る」

「うおぉー！　董卓様ぁ！　この華雄、一生ついていきましょう！」

董家を継ぎ、長として兵たちに号令する。
その様子に親友は、必ず天下人にしてみせる、と改めて決意する。
ネタキャラの地位を不動のものとする、愛すべき猪将軍は少し熱かった。

「……ちんきゅ、行く」

「あっ、呂布殿ぉ～。お待ちくだされ～！」

「ホンマ、仲ええなぁ」

家族の様子を見に行こうとする天下無双。
それを追うは、自らを専属軍師と名乗るちびっこ。
そんな二人を、クツクツと笑いながら酒を飲む神速。
三人は――厳密には二人――漢の将であり、長安にいた。
儚げな少女を主とする日は、すぐ近くまで迫っていた。

「……うぅ。いつになったら終わるんだ……」

幽州では、普通に出世コースを歩いている者がいた
普通に出来る人かつ、お人好しスキルを持っている為、仕事が集中していた。

「よーし！　今日も頑張るぞー！　おー！」

「ちぃの魅力でメロメロにしてやるんだから！」

「はぁ……。二人揃ってお気楽なんだから」

若干天然気味の、みんな大好き天公将軍。
ない胸を張ってる、みんなの妹地公将軍。
二人に呆れる、とっても可愛い人公将軍。
このとき、自分たちの歌で乱をおきるとは知り得ないことだった。

「お前たち、行くにょー！」

「おうにゃー！」

「了解にゃー！」

「……頑張るにゃん」

南方ではにゃーにゃーうるさかった。

陽は遠い目をして語る。

「あの頃は、仕事量が増加の一途をたどっていたよ……」

と

第十六話（前書き）

そういえば。

翠と蒲公英以外で初の恋姫キャラとの絡みだー。

第十六話

狼とは、元来神聖な動物である。
実際、日本語のこの”狼”というのも”大神”が語源だ。
狛犬などのモチーフとなっていることも、それを証明する一つになるだろう。
主に農業が盛んであった地域の人々にとって、天敵といえる草食動物たちを喰らってくれる狼はありがたいものだった。

しかし、牧畜が主である地域の人々にとっては、狼が天敵だった。
さらに、中世ヨーロッパ時代に語られた人狼伝説、流行り病の狂犬病などにより、狼＝悪、というイメージがついた。
例として、赤頭巾の童話を思い浮かべると分かりやすいことだろう。

……と、狼は一方で好かれ、他方では嫌われ、といった両極を併せもつ存在なのだ。

狼は、幼体や老体、病弱なものといった、弱い個体を喰らう動物である。
それは、狼、というイメージからは想像のつかないだろう臆病な気性からきていた。
それゆえ、（一夫一妻制が基本であるため）雌雄対の２０匹ほどで一つの群れを形成する。
さらに、臆病とは相反するような語の、一匹狼、というのは、成長した狼が群れを離れ、配偶者を見つける間の状態をいうのであり、あまり格好良い意味を持っていない。
縄張りは１００～１０００ｋｍと広い。

つまり、何が言いたいのか。

それは……、

「……完全に皮肉られてね？」

……西涼の天”狼”として名高くなった自分を、陽は考えているのである。

前述したことをすべて知っている、という訳ではないが、両方を併せ持っていることだけは、陽も知っている。

皮肉にも狼と自分に、被っている部分があることもわかっている。

だからこそ解せなかった。

西涼の皆が、天狼、と自分を称賛する理由がわからなかった。

確かに誇り高い、というイメージも持っている。

しかし、それでは足りない。

西涼（と言うより、華北のほとんど）は小麦や酪農が盛んである。

だから、本来、狼は嫌われる立場にいるはずなのだ。

★　★　★

Ｓｉｄｅ　陽

片膝をつき、右手で左の拳を覆い、仰々しく頭を垂れてやる。

左右にはズラリと人が並び、正面奥には何段も上の椅子に腰かける者、すなわち漢の皇帝、劉宏がそこにいた。

「天子様の命により参上つかまつりました、隴西太守馬騰が代理、馬白にございます」

「代理、だと！　貴様、何様のつもりだ！」

うるせぇな。

今から説明すんだろーが。

「最近は五胡の動きが激しくなっております。当初は太守である馬騰が赴く予定でございましたが、くしくも、羌国が大軍を率いて攻め込む、との報告がありまして。封ぜられた土地を抜かれては天子様に合わせる顔が無い。しかしながら、天子様直々のご命令に背くなど、もっての他。……ですから、若輩ながら馬騰が軍師であり、側近を勤めさせて頂いている、私が参上した次第にございます。……何進様、天子様、どうかご無礼をお許し下さい」

「だがしかし、蛮族者など、部下に任せておけば――」

「何進、もうよい」

「りゅっ、劉宏様！　……御意」

面倒くさい野郎だな、あの何進ってやつ。

そんなことはおいといて。

皇帝からの命により、俺は遠路遥々、洛陽にやってきていた。

因みに、羌が攻めてきたから俺が来た、というのは真っ赤な嘘だ。

母さんが、行くのヤダ、めんどくさいんだもん、と駄々をこねたので、仕方なく代理で来ている。

仕方なく、だ（↑ここ重要）。

「して、貴様は馬白といったな？」

「御意に」

「では、天狼と称されているのも貴様だな？　張譲から聞いている」

「……御意に」

よく知ってんなー。
グズの癖に。

「一介の将が、天を冠している……。そのような者が、よくも帝の前に姿を現せたものだ」

「張譲……」

張譲を睨む何進。
悠然とする張譲。
二人の絶えない（らしい）争いの中、今回の軍配は張譲にあがったっぽい。
別に興味ないけど。
ただ、こんなとこでやらんで欲しいな。
うざいから。

えっと、だ。
なんで直々に二つ名のことを聞かれたのかというと。
皇帝を象徴する”天”を冠することはあってはならないらしいんだ

よ。

んなこと知ったことじゃねぇよ、馬鹿。
すっげぇどーでもいいしな。

つか、張譲のドヤ顔パネェ。

「弁明はしないのか？」

「……いえ、私に発言権を頂ければすぐにでも」

まぁ、反逆者やー、って攻められ、家族に迷惑がかかってもあれなんで、取り繕うけどね。

「ならば、申してみよ」

「はっ」

眼鏡の真ん中の橋をクイッ、と押し上げる。
仕事中の射抜くような目が怖い、と皆が言うので、家族の時間との以外は掛けることにしているメガネ。
なんであんのかは知らん。

形は四角の縁なし。
似合ってるんだってさ。
……まぁ、左目眼帯着用の上に眼鏡て、どうかとは思んだけどねー。

「……まず、五胡の国々では、作物が育たない環境ばかりでありますので、放牧や酪農などでしか、日々の糧を獲られません――」

「ふん！　それに何の関係がある！」

何進が反応する。
話の途中に割って入ってくるの好きだなおい。
黙ってろよな。
うぜぇから。
そう思ってても、口に出さず、華麗に流しますけどねー。

「――狼は、主に草を食べる動物を喰らいます。ですから、五胡の人々にとって、家畜を喰らう狼は天敵なのです」

「そうか……。貴様は蛮族相手にもひけをとっていないと聞く。それは本当らしい」

説明を終えると張譲が反応した。
お前、なんで反応したよ。
ち○こないくせにイキがってんじゃねぇよ。
お前も黙ってろよな。
うぜぇから。
と内心思うけど、またも流し、てか無視で。

「この漢において、天とは天子様を表し、五胡にとって、狼とは敵を表します。天狼とは、天に仕えし狼、すなわち天子様に仕えし敵対者、という意味にございます」

「ふん！　自ら劉宏様に仕えているとの発言……先ほどから何様のつもりだッ！」

「この大陸でも家畜は飼われている。……それすなわち、貴様の牙をこちらに向けることを意味するのではないか？」

ホントうるさい野郎だよ、このおっさん共。

少しだけ何進の方へ身体を向けて、話すことにする。

「一介の将が、とんだご無礼を……。しかしながら、この身、この武、この知能、全て天より授かりしものであり、これを天子様に捧ぐは世の理。……すなわち、全ての人々が天子様の為に在り、天子様に仕えているとは言えないでしょうか？」

「……ふんっ」

何進は言葉につまったのか、何も言わなかった。

ま、全部口先だけのでまかせですけどね。

さて、次だ。

こいつもうるさいけど、論点はズレてないからましだ。

張譲の方へ身体を向けて、話し始める。

「確かにこの大陸でも家畜の飼育は盛んです。しかし、いくら家畜といえど、狼は相手を選びます。狼は存外に臆病な動物にございます……天子様”自ら任命された屈強で素晴らしく優秀な方々”に守られては、手足はおろか、牙さえとどきませんし、たてつこうとする勇気すらも起こらないのです。よって、この”天子様が治める、この素晴らしき強国”、漢に牙を剥くことなど、あり得ないことです。私が喰うのは、天子様にたてつく知恵のない獣共のみにございます」

「だがっ――」

適当なこと言って言い逃れようとする。

反論しようとした張譲だったが、それを予想外にも皇帝サマが遮った。

「もうよい、何進、張譲。貴様が馬騰と同じように、忠義の将だと良くわかった。……ハッハッハッ！　今日は気分が良い……貴様の二つ名の件、許そう」

「有り難き幸せにございます」

一度頭を下げる。

見れば途端に、何進と張譲は苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

皇帝のおバカさんが、ただの異名にしても、一介の将が”天”という字を使うことを許した。

さらに、その許可は皇帝自らの言葉だったから、覆すことの出来ないものとなってしまった。

大方、この二つのせいだろう。

褒められて嬉しくない奴はいないだろう。

能力が足りてない、と知りつつも、俺に言わせれば皇帝としての下らない誇りがあり、どこかで自分を信じている。

そこを突き、クズ共を任じたことと、今にも動乱が起こりそうなこの恐国を治めていることについて皇帝サマを褒めた。

それに気分良くし、罪を流した。

……皇帝サマが阿呆で良かった。

……本当にバカで。

……こんなカスのせいで、大陸は不安定だ。

……このクズが派遣した阿呆どもが、無駄な財を集め、さらには才を無駄にしている。

「「……っ！？」」

おっと、いかんいかん。
下らない奴にキレても仕方ないことだ。
余計な敵を作っても面倒だし。
反応した張譲の後ろに侍っている二人。
露出度高いな。
いや、それはおいといて。
赤髪の方はマジにヤバいからな。
でも、結構人がいる玉座で、反応できたのが二人だけとか。

しかし、あの赤髪は蛮族と言われても怒らないのかね？

「……劉宏様」

「おお、そうであった。何進、頼む」

「はっ！　隴西太守馬騰に告ぐ！　貴殿は本日を以て西涼太守に任命する！　拠点を金城とし、今まで以上に励むように！　戦功を期待する！」

「はっ。謹んでお受け致します。最西の地より、天子様のご意向にそえる戦果、果たしてみせましょう」

何進の前に出て、書き記された紙と、西涼太守の証である印を受け取る。
戻って、また同じように膝を付き、左の拳を右手で包み、深く礼をする。
はぁ、これでやっと終わったぜ……。

何進は激情に、張譲はあくまで冷静に。
終始陽に対し、対称的な態度だった。
この違いが、後の熾烈なトップ争いの結果を生むことになる。

★
★
★

「張遼、呂布、貴様らは董卓の下に行け」

「こらまた、唐突で」

「文句があるか」

「……いーえ、ありません」

「ならば行け。すぐにここを離れ、長安に行き、荷物を纏め次第、天水へと向かえ」

「……御意」

張遼は、いかにも不機嫌そうな顔をして退出する。
問うたところで理由を話す人ではないので、自ら聞くことはしない。
どうせアイツのことだろうとは予想はついている。
そうでなければ、わざわざ長安から呼びはしないだろうと内心思っていた。
ただ、一緒にいた者、すなわち呂布は、ずっと首を傾げているのには苦笑した。

★
★
★

ちょっと城内の廊下をさ迷い歩いている。
いわゆる迷子ですが何か？
そしたら……、

「む」
「……あ」
「げ」

……むっつり張遼、無表情呂布が現れた。
いやー、このエンカウントはまずいなー。
片方は中ボス、もう片方はラスボス級とかどんだけ。
しかも、一人キレ気味。
ヤバくね？

「これはこれは、張遼殿に呂布殿。お二方の武勇、辺境の地にまで届いております。いやあ、そんなお二人に会えて、光栄にございますよ」

だいぶ焦ってるようで、自分で何を考えているかさっぱりだ。
ま、当たり障りのない挨拶（？）をしてはおきましたが。

「白々しいやっちゃなぁ……。そんな棒読みな台詞、あるかいな」

「……お前の方が凄い」

今までの怒りはどこに（？）と思うほど、豪快に笑う張遼。

少しだけ口角をあげる呂布。

「六割方嬉しいですよ。張譲様の部下としてでなければ、八割ぐらいかもしれませんがねぇ。あと、お二方に比べれば大したことありませんよー」

「……正直やなぁ。まぁ、ウチかて普通のときに会いたかったわ。……あんときの殺気、尋常やなかったからなぁ。あれ見て、しがらみなく殺り合いたい、と思うんわ、武人としての性ちゅーもんやで？」

苦笑いからの獰猛な笑み。

いやー、あの場で――目の前にいる二人の前で――殺気を洩らしたのは不味ったなぁ。

「今後普通に会っても、絶対殺り合いませんけどね」

「……恋ともやる」

「ちょ、話、聞いてました？」

「……（コク）。でもやる」

でもじゃねぇんだよ。

こっちは死活問題なんだよ、あんたらと闘うことがさぁ。

「……まぁ、機会があれば」

犬やら猫とかの見上げる視線、わかるだろ？

そんな動物のような上目遣いに根負けしましたが何か？

「……約束」

「ウチも忘れんといてやー」

「……ハァ、わかりましたよ。ですが、絶対そんな機会、作ってあげませんから」

是非とも願い下げたい約束をしてしまったのだよ？
ため息ぐらい良いじゃないか。

「……恋」

「は？」

「多分、約束の証っちゅーことやろ。ウチは霞って呼んでや」

コクコクと頷く呂布さん。
便乗して真名を預けてくる張遼さん。
コイツらアホだろ。
そんな簡単に預けてどうすんだよ。
もっと大切にしなさい。

いや、まてよ。
逆に、真名を交換することで、約束の価値を上げてるのか？
ふっ、なかなかやるな……。
……嫌ぁ！

「……ハァ。私は陽です」

俺が項垂れると、張遼は笑い、呂布は不思議そうに首を傾げる。
終始そんな感じの他愛ない会話をして別れた。

★
★
★

Ｓｉｄｅ　三人称

「……どう思う、恋ちん」

「……多分、いいひと」

いつもではあり得ない曖昧な答えに、怪訝そうな顔をする張遼。

「……弱い、けど、強い。怖い、けど、優しい人」

「どっちも矛盾しとるやん」

いつにない饒舌さで、相反する二つを並べる呂布。
呂布の言うことは、ほぼ当たることを知っている張遼は、さらに陽を不審がる。

「……霞は？」

「ウチ？　せやなぁ……よーわからん、ってのが一番やな。ただ、嫌いではない奴やけどな」

張遼は、陽に対して元から興味はあった。

涼州連合筆頭であり、太守である馬騰の軍師。
西涼の人々にとっては天狼であり、賊にとっては死神。
軍師でありながら、武にも心得がある。
興味が湧かない訳がなかった。
そして、見た結果。
玉座の中で、出来る奴、と。
会話の中で、おもろい奴、と判断したものの、率直に言えばわからない。
それは呂布も同じだった。

……だからこそ、張譲があそこまで気にする理由が解せなかった。
陽を、牡丹を、そして、西涼勢全体を。

陽は語る。

「思えばあの日は、いろんなことで綱渡りだったなぁ……。流石に恋ちゃんと霞との約束は泣けた」
と

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2814z/

真・恋姫†無双「外史の外史、ここにあるぞーっ！(改悪？版)」

2011年12月24日10時52分発行